

280号



大阪発

長谷川テルを辿る旅



(長谷川テルと夫 劉仁 1936)

今こそ長谷川テルの勇氣に学ぼう

岩垂 弘

長谷川テルの軌跡を辿り戦争阻止の誓いを新たに

坂井尚美 有元幹明 岩田淑子 竹内 康 田村 豊 橋本幸子

長谷川暁子 芦澤礼子 西原東洋子 木田日登美 西村雅芳 宮崎和子

宮本兼次 宮原 達 山口鞆絵 斎藤千代 西島善治 澤田和子

あごら 280号 2002年12月 長谷川テルを迎える旅

今こそ長谷川テルの勇氣に学ぼう	岩垂 弘	1
テルの軌跡を辿り、戦争阻止の誓いを新たに		2
長谷川テルを迎える中国の旅 その概要		3
長谷川テル・暁子の足跡(年表)		4
長谷川テルと有事法制―日中戦争反対を叫んだラジオ放送の主へ想う	坂井尚美	5
自分を確かめる旅	有元幹明	13
「平和」と「人権」を考えた旅	岩田淑子	17
長谷川テルと日中友好について	竹内 康	19
長谷川テルの魂にふれて	田村 豊	21
死者と出会う旅	橋本幸子	23
前事不忘、后事之師	芦澤礼子	25
母に、そして良心に恥じない生き方を続ける	長谷川暁子	28
「旅のスコア」	西原東洋子	30
「失くした二つのリンゴ」を朗読して	木田日登美	32
遙かなる大地を訪れて	西村雅芳	35
〈詩〉失くした二つのリンゴ―病床にて	長谷川テル	38
歴史の見方が変わった旅	宮崎和子	44
長谷川テルを迎える旅に参加して	宮本兼次	46
反ファシズムを買いた「長谷川テル」に逢う！	宮原 達	49
意義ある旅の体験	山口鞆絵	51
「戦争」を問う旅	斎藤千代	54
旅行業に関わる者として	西島善治	60
旅を企画して	澤田和子	62
.....		
■めじゃーなりすとのめ 取材中の疑問から生まれた連載	佐藤圭子	70
■ぐるーぷ紹介 戦争を許さない女たちのJR連絡会／中国残留婦人交流の会		72
■読書室 赤い夕陽と黒い大地 ほか		74
■あごらめいと さわやかで頼もしい憲法の守り手 木瀬慶子さん		77
■語りかけたいあなたへ 49 ため息	大里知子	78
■TOPICS 松井よりさん、女性平和資料館を呼びかけ／東京都に初の女性区長ほか		80
■集会から 日米地位協定改定と損害賠償法制定を考える合同会議 ほか		82
■あごらのあごら 『あごら』やめるな！の声が殺到／新入会員からほか		84
.....		
目次で振り返る『あごら』30年⑦ (1986年12月～1987年12月)		86
.....		

今こそ長谷川テルの勇氣に学ぼう

岩垂 弘

日中戦争下の中国で、日本軍兵士に向けて反戦のラジオ放送を続けた長谷川テル（一九一二〜四七）のことを、雑誌『軍縮問題資料』に書いたのは一九九三年一月のことである。そのタイトルは「遙かなるインターナショナル——三人のエスペランティスト」。近現代史に偉大な足跡を残した三人の日本人エスペランティスト、佐々木孝丸、長谷川テル、由比忠之進について書きつづった一文だった。佐々木孝丸は、「起てうえたるものよ」で始まる労働歌「インターナショナル」の日本語訳者、由比忠之進はベトナム戦争のさなか、佐藤首相（当時）の訪米に抗議して焼身自殺を遂げた人だった。

なぜ、あの時期にこれら三人のエンペランティストの生涯に言及した一文を書いたのか。一九九一年のソ連消滅によって東西対決が終息し、代わって南北対立が激化しつつあった時期で、南北問題の解決、恒久平和の確立のために各国国民、各民族による新たな国際連帯、国際貢献が求められ始めた時だったからだ」と記憶している。

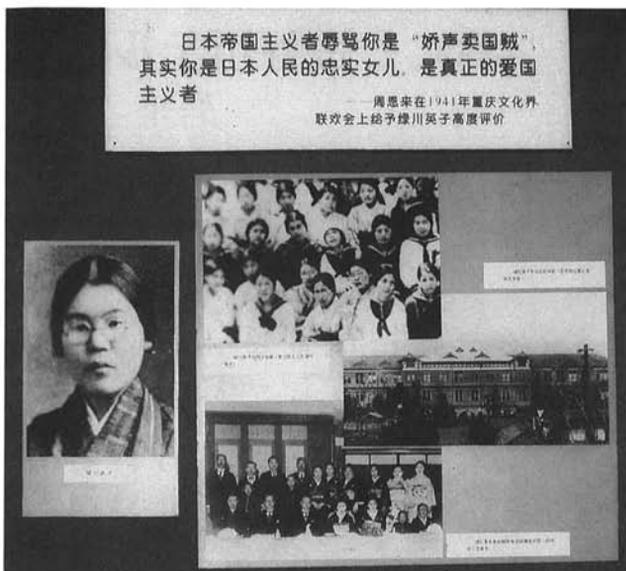
日本人も、偏狭なナシヨナリズムに走ることなく、インターナシヨナリズム精神を發揮すべき時ではないか。そのためには、インターナシヨナリズム精神に立脚してひたすら世界平和実現のために生きた三人の先達に学ぶべきでないか。そういう私なりの訴えを、その一文に込めたつもりだった。

それから十年。私は今、私たち日本人は十年前とは別の視点から改めて長谷川テルの生き方を思い起こすべきではないか、との思いを深くしている。世界で「新しい戦争」が始まり、日本でも、「戦争ができる国」に向けての動きが加速している。改憲の主張、有事法制を求める言論が勢いづき、「物言えば唇寒し」的な雰囲気国を覆いつつある。祖国の新聞から「売国奴」とののしられても日本への反戦放送をやめなかったテル。その勇氣にこそ学ぶべき時が到来したような気がしてならない。そういう意味で、今回の「長谷川テル特集」はまことに時宜を得た企画と考える。（ジャーナリスト）

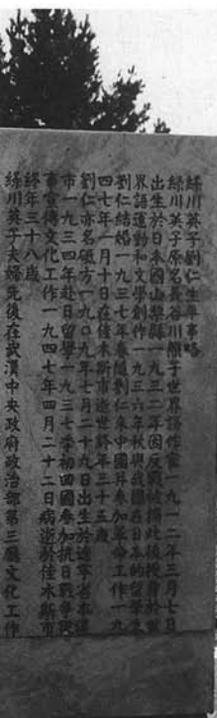
戦争阻止の誓いを新たに (撮影 西島善治)



明と森に包まれた比翼塚は美しかった



日本人の中にも、身命を賭して侵略を阻止しようとした人がいた。——テルのコーナーに救われる。



功績を讃える墓碑銘



花束をささげて不戦を誓う一行

長谷川テルの軌跡を辿り

日本侵略軍「731部隊」遺跡の紹介

「満州第731部隊」は当時の日本最高支配者の命令により、中国で創立された一つの特務部隊である。同部隊は1935年にハルビンの平房地域で生物兵器の開発と実験基地の建設を進め、当時の日本軍が東南アジアの戦場で行っていた細菌戦の指揮中心地になっていた。

この「人間を食う窟窟」呼ばれていた基地において、「731部隊」は残酷な手段で人体実験を行い、細菌兵器の研究の開発に取り組んでいた。歴史の資料と考証によると、1935年から1945年までのわずかな期間に少なくとも3000余名に達する国内外の抗日反満州の人士と罪のない人々が人体実験に使用され、殺害された。

1945年8月、日本は敗戦で降伏した。そして「731部隊」が敗走する時、その凶暴な犯罪を隠蔽するために、この地域の施設を激しく破壊した。現在発見されている遺跡は合わせて23ヶ所に上る。



墓前に花を献げる暁子さん

華日軍七三一部隊罪証陳列館には
殺された「マルタ」の声があふれていた。



ジャムス市を表敬訪問 副市長と歓談



「国際主義戦士」の

『長谷川テル』を辿る中国の旅 その概要

長谷川テル（一九一二〜四七）は二十代半ばでエスペランティストの同志である中国人青年・劉仁と結婚。中国に渡り、日中戦争下の中国で日本の侵略に反対し、ラジオ放送を通じて日本軍兵士に「無駄にあなたたちの血を流さないで下さい。あなたたちの敵は海

のこちら側にはいません」と呼びかけた女性である。日本の敗戦後、東北地方のジャムスでわずか三十五歳で亡くなり、さらにその三か月後には、最愛の妻を追うように夫の劉仁も三十六歳でこの世を去った。二人はジャムスの革命烈士墓に葬られ、幼い二人の遺児があとに残された。

一九九一年、〈あごら大阪〉世話人で〈夕陽丘女性史グループ〉を主宰する澤田和子さんは、テルの遺児・長谷川

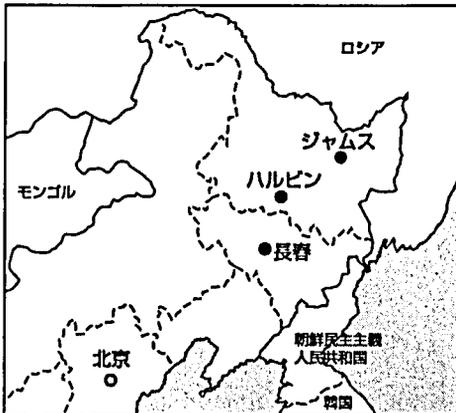
暁子さんと知り合い、「長谷川テル」の名を初めて知った。澤田さんは彼女の生涯に衝撃を受け、日本ではあまり知られていないテルの業績を世に広めるために奔走する。その努力は一九九九年に発行した『あごら二五三号 闇を照らす閃光―長谷川テルと娘・暁子』に結実した。

その後も澤田さんは「いつかテル・劉仁夫妻の終焉の地であるジャムスを訪れたい」という思いを抱き続け、二〇〇二年九月、ついに『長谷川テル』を辿る中国の旅を実現した。

九月十四日から十九日、北京へ長春へハルビンへジャムスを巡る五泊六日の中国・東北地方の旅で、澤田さんの呼びかけに応えた参加者十九名は何を見、何を感じてきたのだろうか。今回

の『あごら』では、参加者一人ひとりの旅の想いをお伝えする。

◆今回の旅の訪問地



★旅の日程★

九月十四日(土) 関西国際空港十五時
二五分発の飛行機で出発のはずが、出
発十日前に中国民航からの通達で、い
きなり十一時発の臨時便に振替えにな
り、びっくり(日中国交回復三十周年
がらみらしい)。連休で大混雑の関空で
結団式もそこそこに一路北京へ。北京
空港では一足先に北京入りしていた長
谷川暁子さんと兄の故・劉星さんの御
家族、北京留学中の木田日登美さんが
一行を出迎える。当初の予定より早く
到着したため、天壇公園と景山公園を
見学。その後市内の老舗で北京ダック
の夕食。(シエラトン長城飯店泊)
十五日(日) 午前中、万里の長城(八
達嶺) 見学組と自由行動組に分かれる。
昼食(中国歴史博物館内の広東料理レ
스토랑) で合流し、食後は駆け足で
故宮博物院見学。夕方十七時半発の飛
行機で吉林省の省都・長春へ。(吉隆坡
飯店泊)

十六日(月) 午前中、長春市内見学。
ラストエンペラー溥儀が暮らした『偽

皇宮』、長春映画製作所などを見て、長
春が以前は「新京」と呼ばれた満州国

の首都だったことを実感。昼食は東北
名物の餃子の多様さに驚き、十四時発
の列車で雄大な大地を眺めながら、約
三時間半で黒龍江省の省都・ハルビン
へ。夕食は市内のロシア料理店。ここ
で初めて参加者各自が自己紹介。(哈爾
濱昆侖大酒店泊)

十七日(火) 朝食後、すぐ郊外にある
七三一部隊罪証陳列館へ。館長との面
談のあと、館内見学。部隊本部の建物
がそのまま陳列館になっていて、三千
人以上を生体実験で殺害した日本軍の
残虐さがなまましい実感とともに迫
り、全員言葉を失う。そのあと市内の
東北烈士紀念館へ。一行を歓迎するセ
レモニーが開かれる。館内にはテルの
独立した展示コーナーが設営されてお
り、遺品も飾られていたことに一同感
激。午後、貸切りバスでジャムスへ。
バスはカーレースなみの猛スピード。
生きた心地もしないほどだったが、つ
いに白煙を噴出してエンスト。代わり

のバスが来るまでの三時間を待つこと
に。

これを好機として参加者各自が平和へ
の思いを語り合い、旅の中でも最も印
象深いひとときとなる。

代替バスに乗り換え、夜十時を回っ
てようやくジャムス着。予定していた
ジャムス副市長との会食会はキャンセ
ル、ホテルで夕食。(農墾大厦泊)

十八日(水) 柳条湖事件記念日である
この日、墓参に先立って昨日から延期
になったジャムス副市長との会食。そ
の後、ダム湖のほとりにある小高い丘
に立つテル・劉仁夫妻の墓所へ。フェ
ンスに囲まれた立派な白い花崗岩作り
の墓に向かい、暁子さんに続いて参加
者各自が手を合わせる。市内で昼食後、
十五時発の飛行機で北京に戻る。夜は
お別れディナー。それぞれが旅の感想
を語り、暁子さんが一同にお礼の言葉
を述べる。(シエラトン長城飯店泊)
十九日(木) 早朝ホテルを出発し、九
時十五分発の飛行機で帰国。午後、関
空で解散。おつかれさまでした!

長谷川テル・曉子の足跡

1912 (明治45)

3月7日 山梨県猿橋で出生。

父・幸之助、母よね。姉は幸子。

1923 (大正12)

東京府立第三高女(現在の駒場高校)に進学。

1929 (昭和4)

奈良女高師・文科に進学。

◆前年から文部省の思想統制が顕著に。各帝大の社研に解散命令。河上肇(京大) 向坂逸郎(九大)らが大学から追放。

◆4月 共産党員の全国的大檢舉。

◆10月 世界大恐慌。

1931 (昭和6)

「堤中納言物語」を研究テーマに。学内の短歌サークルに参加。

◆9月18日 柳条湖事件、満州事件勃発。

1932 (昭和7)

◆3月1日「満州国」建国宣言。

◆5月 五・一五事件。

6月 級友・長戸恭らとエスプレントを習う。

9月 8・30事件思想弾圧で逮捕。長戸と退学処分。帰京する。

12月 日本プロレタリア・エスペラント同盟に参加。

1933 (昭和8)

◆1月 ナチスドイツ、政権掌握

◆3月 日本、国際連盟脱退。

4月 日本エスペラント学会に無給勤務。5月『エスペラント文学』創刊に参加。

1934 (昭和9)

1月 NHKアナウンサー試験第一次に合格、二次試験に出頭せず。

◆10月 中国共産党「長征」開始。

1935 (昭和10)

2月 上海エスペラント協会『ラ・モンド』に「日本婦人の状況」を発表。

1936 (昭和11)

2月 婦人エスペラント連盟の

発起人の一人に。

◆2月 二・二六事件。

3月 劉仁と築地小劇場で『夜明け前』を観劇。

秋 家族の同意を得ず劉仁と結婚。

1937 (昭和12)

1月 劉仁、抗日救国運動のため中国に帰国。

4月 テル、英国船で横浜より上海へ。

◆7月7日 蘆溝橋事件、日中戦争勃発。

◆8月 上海陥落。

11月 上海から香港へ。12月廣州へ。

◆12月 日本軍、南京占領(南京大虐殺)。

1938 (昭和13)

2月 テル、日本のスパイと疑われ、香港に追放される。劉仁もあとを追う。

◆4月 日本、国家総動員法公布。

9月 郭沫若らの協力で漢口へ。国民党中央宣伝処対日科で日本

語の反戦放送に従事。

◆10月27日 武漢陥落。

11月1日 東京・都新聞が「婦声売国奴」テルの記事を掲載。家族には脅迫文が届く。

12月 重慶へ。文化工作委員会で働く。

1939 (昭和14)

◆1月 重慶爆撃始まる。

◆9月 ドイツ軍ポーランド侵入。

第二次世界大戦開戦。

1940 (昭和15)

◆10月 大政翼賛会発足。

1941 (昭和16)

6月 重慶で『生きてゐる兵隊』のエスペラント訳を発行。

7月 重慶文化人の会で周恩来が「日中両国民の忠実な愛国者」と称賛。

10月 長男・劉星誕生。文集『嵐の中のさつき』出版。

◆12月 真珠湾攻撃、太平洋戦争勃発。

1945 (昭和20)

◆3月 東京大空襲

◆4月 米軍、沖縄に上陸。

5月 『戦う中国で』を出版。

◆8月 広島、長崎に原爆投下。

日本敗戦。

11月 重慶を離れ、武漢へ。

1946 (昭和21)

1月4日 劉星(四歳) 国民党特務により誘拐。六日後解放。

◆1月10日 国・共産党の停戦協定調印。

2月 東京・上海を経て、3月

濟陽へ。

3月 長女・劉曉嵐(長谷川曉子) 誕生。

夏 夫とハルビンで東北行政委員会委員を担当。のち、ジャムスへ。

1947 (昭和22)

1月 東北社会調査研究所研究員に任命される。10日、妊娠中絶の感染症で死去(享年三十五歳)。

4月22日、劉仁、肺水腫で死去(享年三十六歳)。夫婦はジャムスの革命烈士墓に葬られる。遺

児、劉星は叔父の元で育ち、劉

曉嵐は牡丹江の孤児院で三歳ま

で育つ。

1948 (昭和23)

8月 由比忠之進、牡丹江で劉仁の弟からテルの死を聞き、翌

年9月に日本に伝える。

1949 (昭和24)

◆10月1日 中華人民共和国建国。

1950 (昭和25)

曉嵐、ハルビンの保育園に移転。

1952 (昭和27)

ハルビン小学校入学。

1961 (昭和36)

兄・劉星と叔父の家で再会。

1966 (昭和41)

◆文化大革命始まる。

1969 (昭和44)

9月 曉嵐、唐山鉄道学院大学

卒業。文革で寧夏回族自治区へ

下放。

中衛鉄路学校で数学教師。

1971 (昭和46) 結婚。

1972 (昭和47)

◆9月 日中国交回復。

1974 (昭和49) 長女誕生。

1976 (昭和51)

◆9月 毛沢東逝去。10月四人

組逮捕、文化大革命終息。

1977 (昭和52)

8月 劉星から世田谷区長宛て

の、テルの親族の消息をたずね

る手紙で、テルの姉弟と連絡が

つく。

1978 (昭和53)

8月 テルの姉、西村幸子訪中。

北京で二遺児と対面。

1979 (昭和54)

8月 劉星・劉曉嵐、初来日、

母の足跡を訪問。

1980 (昭和55)

ドラマ「望郷之星」制作、放映。

1981 (昭和56)

北京鉄路工廠職科大学で数学教師。

1985 (昭和60)

日本留学(電気通信大学)奈良

女子大学)

1987 (昭和62)

中国へ一時帰国。

1989 (平成1)

再々来日、福島大学に留学。

1990 (平成2)

4月、大阪経済法科大学国際部

に非常勤講師として就職。夫と

長女を呼び寄せ、堺市に居を構

える。

1993 (平成5)

2月 日本国籍取得(日本名・

長谷川曉子)

1994 (平成6)

山口県(中国残留婦人交流の

会)で「私の生き方」と題して

講演。

1996 (平成9)

12月30日 劉星、北京で死去

(享年五十五歳)

1999 (平成11)

2月 京都立命館平和ミュージアム

で「私なりの平和への歩み」講演。

「長谷川テル」と有事法制

―日中戦争反対を叫んだラジオ放送の主に想う―

坂井 尚美

一、「日本帝国主義者辱罵」「你是嬌声売国賊」

其実は 日本人民的忠実女儿是真正的愛国主義者」

周恩来在一九四一年重慶文化界連欢会

上給予緑川英子高度詳价

(日本帝国主義者は「嬌声売国者」と罵ったが、貴女こそ日本国民の忠実な娘であり、真の愛国者だ。周恩来が一九四一年重慶の文化界主催大会で緑川英子を高く評価した。)

いきなり長々と漢文を引用したが、これは、二〇〇二年九月一七日、中国ハルビンの東北烈士記念館を訪ねたとき、特設展示コーナーで見た「長谷川テル」の紹介プレート全文である。

長谷川テル(中国での通名緑川英子)といっても、ご存知ない方のほうが多いだろう。

日中戦争たけなわの一九三八(昭和十三)年二月、当時の漢口(現在の武漢)から中国侵略中の日本軍兵士に向けて「あなたたちの敵は、海のこちら側にはいません、私を売国奴と呼んでもらっても結構です」と訴えて反戦のラジオ放送をした日本女性その人である。

二、わたくしが長谷川テルの名を初めて知ったのは今から十年前の一九九二(平成四)年大阪の(夕陽丘女性史グループ)主宰者、そして(あごら大阪)責任者の澤田和子さんから聞き及んだことからである。

当時すでにテルを主人公にした日中初の合作テレビドラマ『望郷の星』(栗原小巻 主演、一九八〇年制作)が放映されており、また翌九三(平成五)年二月には関口宏・司会の日本テレビ「知ってるつもり」でテルの紹介番組が放映されていた頃である。

テルは一九一二(明治四五)年、山梨県で生まれ、二九(昭和四)年、奈良女高師に入学し、三三(昭和八)年、日本エスペラント学会に入り、婦人エスペラント連盟の発起人となった。

ともにエスペランティストであった中国からの留学生劉仁と知り合って、一九三六(昭和二)年に結婚し、三七(昭和一二)年、抗日救国運動のために中国に帰国した劉仁のあとを追って上海に渡った。

日本軍の中国侵略が本格化した三八(昭和一三)年、郭沫若らの協力で漢口にいたとき、中国国民党中央室伝対日課に勤務し、日本語で冒頭のような反戦放送をしたため、当時の日本国内ではこの非国民が何者かで大騒ぎとなったのである。

当時東京『都新聞』がテルの記事を大きく報道し、日本の家族周辺には脅迫文まで届いたという。

三、その後、九四(平成六)年夏ごろ、澤田和子さんからテルの遺児の一人である長谷川暁子さんを紹介され、ある事件の依頼を受けることとなったことから、暁子さんやその兄 劉星^{リュウシン}さん

とも交流を持つことになり、今日に至っているが、今は故人となった高橋正毅弁護士(わたくしとは母校同志社の後輩)が中国政府公認第一号の外国人弁護士として活躍中であつた北京で、劉星さんを引き合わせたのもこの頃であつた。

劉星さんの想い出については、さきに本誌の長谷川テル特集号(あごろ二五三号)で触れたことがある。

その劉星さんも一九九六(平成八)年十二月、胃癌のため死去された。

テルの唯一の遺児となつた暁子さんは現在、同志社大学等で中国語の講師として活躍中である。

ここで、テル母子が世話になつた、わたくしが知るかぎりの主な方がたも紹介しておきたい。テルが横浜から上海に渡つたときに助力した宝木武則さん(九十一歳で堺市に健在)、テル夫妻が瀋陽在住中自宅に同居させた故長谷川慶太郎さん、その娘の本間七葉さん、一九七八年暁子さんと劉星さん兄妹と親戚の初顔合せを北京で実現させた澤地久枝さん、各界に兄妹の来日を働きかけた土井社民党党首など、多岐にわたる。

四、二〇〇二年九月十四日から六日間、テルを辿る中国東北部の旅が企画されて、前記澤田さんや暁子さん、斎藤千代さんらとともにハルビンの東北烈士紀念館やテルの終焉の地である中国境に近い佳木斯^{ジャムス}などを赴けたが、現地を受けた温かい歓迎や墓参などは、わたくしの今までのツアー体験では味わえなかつた終生の想い出となる旅となつた。

東北烈士紀念館では、日中戦争当時の中国側の抗日運動で闘つた人たちに交じつて、長谷川

テルのコーナーが特別に設けられ、彼女が日本で愛用していた着物、メガネなどがガラスケースに展示され、その壁面に冒頭の紹介プレートが掲げられていた。

また佳木斯では市内近郊のダム湖が南面に見える風光明媚な高台公園の一角に、テル・劉仁夫妻の大きな墓地が同市により建立されて行き届いた手入れが施されているのを確認することができ、あらたな感慨にひたるとともに、あらためて中国でのテルに対する評価の大きさを思い知らされた。ちなみにこの墓地は市販の旅行誌『地球の歩き方(大連と中国東北地方の部)』(ダイヤモンド・ビッグ社刊)に写真入りで紹介掲載されている。

五、本年は日中国交正常化三十周年にあたるため、両国は互いにいろいろな催しが盛大に行われたが、栗原小巻さんも指摘されていたように、今日の日中の良好な関係を見聞するにつけても、戦前のテルの勇気ある行動を忘れてはならないと思う。

それにつけても、本稿が印刷される頃には有事法制問題が本格的に俎上に乗っていることと思われる。

わが国は一二七〇年代のあの蒙古襲来以後八世紀の間、外からの侵略を受けたことのない国である。一五九一年の秀吉の朝鮮侵略以来、日清、日露戦争に続く日中、太平洋戦争と、この二百年間、たて続けに外国への侵略の絶え間がなかったこの日本がまたまた「有事」と称して先手を打って外国からの武力攻撃に備えようというのである。

わたくしが日頃通勤している大阪の阪急電車の駅構内のポスターの文句が極めて辛辣に言いあてている。「戦争は準備をすつとやってくる(阪急電鉄労働組合)」。まさにそのとおりである。

長谷川テルの叫びが平成の今またまた聞こえてくる気がする。「あなたたちの敵は(日本海)の向こう側にいませんよ」。

六、この度の有事法案につき問題点はいろいろあるが、一つだけピックアップしておきたい。なかなか陽の目を見ない「国民保護法制」についてである。

わが国内で有事(戦争)が起こった場合、どこから考えても国民の保護などできるはずがない。この点につきここ十数年間の「防衛白書」は、正直にも毎年わずか三行の同じ文章を載せ続けているのをご存知だろうか。いわく「わが国においては民間防衛に関してみるべきものがない。今後、国民のコンセンサスを得つつ、政府全体で広い観点から慎重に検討していくべきものである」。とどのつまり、民間防衛組織は「自治会、町内会が核」(片山総務相の発言)にしかないのである。

わたくしたちは、今一度、敗戦直後の弊原首相発案になる憲法第九条を熟読吟味すべきときではないか。

一九九九年ハーグで開催された世界市民平和会議での、つぎの声明を呼び覚ますときであろう。

「各国議会は、日本国憲法第九条のような、政府が戦争をすることを禁止する決議を採択すべきである」。

二〇〇二年十一月二十日記(弁護士)

自分を確かめる旅

有元 幹明

「長谷川テルを辿る旅」は自分の生き方を確かめる旅でもあった。

一九三七年といえば日中戦争が中国全土に拡がる盧溝橋事件の年であり、この年テルは日本を離れ中国に渡り、日本の中国侵略の不義を許さない活動に身を投じている（この年の十二月南京では日本軍による大量殺人が行われた）。

「あなたの敵はここにはいない。中国人を殺してはいけない」という地下放送を聞いたという元日本兵（ピース・おおさか）で栗原小巻氏を招いて開いた講演会の会場からの発言者と出会った私は、その時からテルという一日本女性を強く意識するようになった。

日本の敗戦後間もなく三人目の子供を妊娠し、その経過が悪く三十五歳の短い人生を駆け抜けた彼女の墓が中国東北地方にあるとは聞いていた。

そこを目的地にした今回の旅は、テルの娘、長谷川暁子さんが同行するというので、どうしても参加したいと思っていた。

それにしても、この旅の仕掛け人澤田和子さんの大仕掛けは見事であった。朝日新聞に大きくデカデカと取り上げられた記事は、「行けません」とは言えないものとなった。

日中戦争に反対「裏切り者で結構」



山梨県生まれ。奈良女大、聖徳女大、山口県立女子大へ進学し、国際学を専攻。無敵にあたり、勝エスプレントの学習を避けて反戦思想に目覚めた。中国人留学生と結婚して37年、上海へ。直接日中戦争が勃発した。反戦を叫びかけた。

大阪の女性ら

ドラマに感銘、中国へ

日本の新聞は「裏切り者で結構」と書いて「売国奴」と書いて「結核です」と意に介さなかった。テルはそんな国内の空気を知らながら「私を」

裏切り者と呼んでくたさう。革命烈士墓に参り、今昔日中戦争の英雄とじて敬びられている。大阪市で女性史研究グループを主宰する澤田和子さん(83)は、テルの人生を描いた日中合作ドラマ「満洲の星」(80年制作)を「有法活劇」(80年制作)と見做して、旅の計画を凝めてきた。その呼びかけに、市民団体「多岐連帯」などの約40人が応じた。テルの長女(88年)に日本国籍を取得した大阪府堺市在住の長谷川勝子さん(86)も同行する。

旅は9月14日から6日間予定。テルらの足跡

テルの勇気 たどる旅

日中戦争下の中国で、日本軍の侵略に反対し続けた日本人女性がいいた。長谷川テル(1912〜47)。その生き様を通じて日中の関係を考えようと、大阪の市民グループが9月、テルの足



長谷川テル

跡をたどる中国・東北地方への旅に出る。テルの遺品の箱物も中国に贈られる予定だ。今年は日中国交正常化30年。「節目の年に、両国の友好に身をまかせたテルに光をあてたい」といふ。



は人類の進歩と対立するものではありません。そこでなければ、排外主義です。「ヒトラーは自分につづろの悪い書物を焼きた。日本が政府と同じことをやっている。火を使わなかつただけの話だ」

権威主義、軍国主義を中国へ密輸する長谷川テルの遺品の箱物を贈る澤田和子さん(83)と坂井尚美弁護士(大阪府北區西天満2丁目)

真正面から見据え、中国各地から、エスプレント、学するほか、テルが死んだチャムス市で墓参し、終戦後の47年、2人の現地の市長との交流会子も死して手術中のももある。

出陣に先づ、今月20日には、東北烈士記念館の手沢力副館長が来日し、勝子さんがテルの遺品の箱物を紹介するコーナーに展示される予定だ。

旅の団長を務める大阪弁護士会の坂井尚美弁護士(88)は「有法活劇」に議論される中こそ、テルの勇気を見直したい」と語る。勝子さんは「日中友好を願ってテルを多くの人に知って欲しい。箱物はたった一つの大事な遺品だが、役に立ってほしい」と話した。

中国。山西省黄土高原での緑化協力にボランティアで何回も訪中している私は、近代化進む北京や上海の変貌振りには余り関心を持っていない。

今回の北京経由のコース（北京―長春―ハルビン―佳木斯―北京）は私には無駄で、二泊を大連や瀋陽にしてほしかったという感想を持っている。

長春

「満州」という傀儡国家時代日本が造ったという街は道路幅も広く、こんな都市計画を当時の日本人がやったのかと不思議であった。

関東軍の建物がそのまま今も使われているが、日本の城を思わせる威容に、軍がこの地で行なった数かずの蛮行に、中国の人びとの思いや如何、と思わざるをえない。

「偽満皇宮博物院」の中庭の「勿忘九・一八」の碑は江澤民の筆だが、訪れた日が九・一六。九・一八集会の舞台づくりにも「勿忘」の思いを見た。

ハルビン

「日軍七三一罪証陳列館」の展示は、ピースおおさかでの特別展とは比べるべくもない迫力で、ここにも中国の「勿忘」の思いを見た。

東北烈士紀念館

○二年八月にピースおおさかに来られた千濱力副館長と再会。その時長谷川暁子さんから寄贈されたテルの着物がショーケースに入れられ展示されているのを見て、このミュージアムの姿勢がわかるように思えた。ここは黒竜江省革命博物館でもあり、反満抗日の戦いの歴史が展示されており、その内容とスケールの大きさに驚嘆したものである。

佳木斯

ハルビンから高速道路を疾走していたバスがエンコシ、ピュンピュン車が行き交う道路上での代替車到着までの三時間余は参加者がそれぞれ思いを語ることで過ごし、今回の旅で最も充実した時となった。慌てず、騒がず、悠然としていた仲間に敬服したものである。

長谷川テルは、中国では緑川英子として日本人としては数少ない烈士であり、その墓地は湖を眼下にする小高い丘にあり、花崗岩の立派なもので彼女が佳木斯の人びとに敬愛されていたことを伺わせる。

九・一八のその日、佳木斯市役所を表敬訪問した。暁子さんが母の墓を管理してくれている市に対して感謝を伝えている姿は感動的だった。昼食を共にした市長秘書との対話の中で「世界を不安に陥れているのはアメリカであり、そのお先棒を日本が担いでいる」と云う彼に、こちらも大いに同意したものである。北辺の街で適格な世界情勢が語られたことに驚嘆した。

今年の九月は、ここが極寒の地とは思えない暑さだった。このロシアとの国境に近い地にやっと来ることができた。往時の抗日戦線がどんな展開をしていたかは想像の域を出ないが、この広大な中国の大地を南の広州から北辺のここまで彼女は行動していたという。その信念たるや、どのようなものだったろう。日本にいる家族が政府・軍部により弾圧されることが当然予測される中で、侵略反対の多彩な行動をせざるをえなかった彼女の心の中に入ってみたい。苦勞せずにここまで来た者には理解は無理であろう。

この旅はこれからもいかなる事態になろうとも戦争の動きに反対していくことを決意する旅であった。

(元ピースおおさか事務局長・9条連近畿世話人)

「平和」と「人権」を考えた旅

岩田 淑子

旅行中『あゝら・二五三号』を通して、少しだけ知るようになった長谷川テルさんの生き方、平和を求める厳しさと優しさにふれることができた。私にとって「平和とは」「人間とは」を原点に立ちかえって、考えさせられた貴重な経験のできた、感動の毎日だった。

私ことになるが、私の父は戦死している。四人の子ども（末っ子の弟は小学二年生で死去）を残された母は、父の友人の紹介で、何とか公務員の仕事につくことができ、私たち三姉妹を育ててくれた。そんな母の口ぐせは、『女も経済力を持たなければ』だった。そして一番末っ子で、不器用で何の取り柄もない私に、上の姉たちより少しだけ長く専門教育を受けさせてくれた。

そんな母の影響を受けたのだと思うが、私は結婚して子どもが生まれても仕事を離さなかった。だが二番目の子どもが生後七か月の時、点頭てんかんと診断された。重い障害をもつことや、治療が大変になることなど医師から説明されたとき、経済的にゆるされるなら仕事を離れたと思う。幸か不幸か私の選んだ夫は、経済的に自立の困難な職種でもあったので、私は何度か仕事を変わったが、ずっと続けてきた次第である。

六十歳定年を目前に、変則勤務をしていて身体にガタがきていた私に、娘から「私も働いているし、お母さんボチボチ仕事をやめて自分の好きな時間を作ったら」との嬉しい助言で、フルタイムの仕事をやめてしまった。でも自分の時間はあまり持てず、地域の医療施設や、障害者関係にかかわるボランティア活動がどつと押し寄せてきているこの頃である。そんな近況の私に、旧友でもあり、何かと私の心の支えになってくれている木田日登美さんから、この旅をお誘いいただいた。

五泊六日の旅を通して重く心にのしかかったことと、さわやかに心に残っていることの両極面がある。一つは、ハルビンで坂井団長も言われたが、『東洋のアウシュヴィッツ』に匹敵する、否それ以上の残酷さを物語っていた「七三一部隊罪証陳列館」での息苦しい見学であった。そしてその対極に感じたのは長谷川テル夫妻の墓地の厳粛なまでの感動であった。佳木斯の湖畔にゆつたりとたたずむ墓標を前にして、私は心静かに「平和」を享受することができた。障害の重い我が子の生命が、人権が、しっかりと守られているのも「平和」があつてこそと強く思った。

この旅は毎日の生活の煩雑さに埋没されている私にとって「生き方」の原点にかえる、とても有意義な旅であった。輝いて生きていらつしやる多くの方がたと出会えたことにも深く感謝している。

(滋賀県から参加)

長谷川テルと日中友好について

竹内 康

「長谷川テルを辿る中国の旅」に参加させていただいた。その中で強く感じた二つの点について記す。

私はこの旅以来、長谷川テルという人のことを「杉原千畝の女性版」と位置づけている。両氏は他国民の命を救うため、自国の戦争政策に逆らってまで信念を貫いた。本人の行為のみならず、周囲の状況にも重要な共通点が見受けられる。それが、結果的に両氏の祖国である、わが日本のあやまちを世界中にさらすことになったのは残念である。

長谷川テルは、反戦活動のため母校（奈良女子高等師範）の学籍を剥奪され、いまだに復籍されていないと聞いた。

杉原千畝もまた、多くのユダヤ人をナチスドイツから救ったために外交官の地位を追われた。おどろくべきことに、彼がやめさせられたのは一九四五年以降のことである。ナチスの力が強大で、日本と同盟関係にあった時期ならまだしも、ナチスが降伏をして、かの悪名高いユダヤ人政策を迎合する必要がなくなったはずの時に、日本政府はこの偉大なヒューマニストから職を奪ったのである。

今日に至っても、わが国のマスメディア等の両氏に対する扱いは不当に低いように思える。そのため、今でも両氏は自国民より他国民に尊敬されているように思える。

長谷川テルに対する中国人の思いは杉原千畝にたいするユダヤ人の思いに一脉通じるものがあると思う。それにひきかえ、最も両氏を大切にあつかわねばならないはずの本国での軽いあつかいは、日本人として大いに恥ずべきだと思う。

もう一つ印象的だったのは、日中国交回復三十周年がさかんに強調されていたことである。それについて「日中国交正常化」なる言葉をさかんに見聞きするが、これはおかしいと思う。

日中国交回復は、当時アメリカが中国と国交を開いたのに日本が右ならえした、いわば対米追従によるものだと思われる。それでも、米中和解が真の友好によるものであれば、それへの追従も大いに意義はあるが、現実には決してそうではないと思う。

アメリカはベトナム戦争に敗れて、中ソ両国を共に敵にまわす力を失って、やむなく中国を懐柔しようとし、中国は中国で「敵の敵は味方」の論理のためにイデオロギーを度外視した、いわゆる御都合主義の結果だと推測される。

他国のエゴに追従して開いた国交が「正常化」などと言えるのか。そのようないびつな形でスタートした弊害がこの三十年で解消されたのか、大いに疑問である。

その他いろいろと有意義な勉強をさせていただいた。どうもありがとう。

長谷川テルの魂にふれて

田村 豊

私は、澤田さんが日中戦争下の中国で日本兵に向けて『反戦放送』をした長谷川テルの実践に感動し「一人でも多くの人にテルを知ってもらおう」ために積極的に活動してこられたことに、心を打たれて、長谷川テルが、中国の大地で「何を思い、何を実現しようとしたのか」を体で感じ、自らの反戦・平和のたたかひの糧にしたいと、参加を決意した。

私は、今回の旅で自らビデオ記録係を担当し、八時間のデジタルビデオテープ四本分を収録し、それを四十五分間にまとめ、参加者にお渡しした。私は、南京大虐殺や平頂山虐殺の歴史的事実については組合の平和研修で学んでいたが、今回ビデオ越しに見た長春「偽満皇宮博物院」やハルビン「七三一部隊罪証陳列館」の真実により、あらためて日本軍が中国の大地で繰り広げた数かずの残虐・非道な歴史的事実に怒りを煮えたぎらせた。

国交回復三十年に長谷川暁子さんをはじめとした日中友好訪問団が、各記念館を訪問し墓参りした意義は高く評価され、「長谷川テルの後見人が『九・一八』を記念するためにハルビンに来る」という見出しで九月十八日に地元紙で新聞報道され、テレビ局も私たちに同行するなど、私たちは中国の方がたと多く意見交換することができた。

その中で印象深かったのは、佳木斯市役所職員の話だった。彼は「個人的意見」としながら

も、九月十七日の小泉首相の訪朝に対して「彼が、本当に日朝友好や平和の実現のために訪朝したのなら歓迎すべきことだが、靖国神社参拜問題や有事法制の制定をめぐるこの間の言動からすれば、むしろ日本の進むべき方向を憂慮している」と語った。私たち一団は「そのとおりだ」と言わざるを得なかったし、私自身、侵略戦争を被った中国人民の怒りと危機感に触れた思いだった。

その後私たちは、過去への反省と将来への誓いを胸に抱きながら、「テルと劉仁の墓参り」を行なった。二人の墓は、佳木斯市郊外のダム湖畔の小高い丘の上になりっぱに据えられていた。すばらしく綺麗な環境の中で、管理も行き届いており、佳木斯市側の思いやりと温かみを感じた。私は献花した後、二人の御霊に合掌し「テルさんの志と実践をしつかりと受け止め、JR西労としても反戦・平和をたたかう」ことを誓い、礼拝した。墓参りでは、晁子さんが二人の眠る石棺を、優しく撫でられていたことがとても印象的だった。

私は、今回の旅で多くのことを体を感じ、多くのことを学ぶことができた。長谷川テルの反戦エスプレッション活動家としての強い意志と行動力は、彼女の純粋で人間愛・人類愛に溢れるヒューマニズムから生まれたのではないかと思っている。そして、彼女を肉体的にも精神的にも支えたのが夫の劉仁であったと思うのである。

私たちが今、「長谷川テルの意志に応える」ということは、有事法制を成立させ、憲法九条をも改悪し、日本を「戦争ができる国」にしようとする権力者とそれを追認する者たちに向かつて「われわれの敵は海を渡った向こう側にはいない」と、多くの人びとと叫び、具体的に行動することではないだろうか。

(JR西日本労働組合 中央本部執行委員長)

死者と出会う旅

橋本 幸子

長谷川テルの足跡をたどる今度の旅は、日本歴史の恥部をたどる旅であつた。その中で、東北烈士記念館に展示されていた長谷川テルの肖像と遺品だけが、なぜかホツとする時空間であつた。そこには、国際反戦運動家・緑川英子（長谷川テル）が永遠に生きているから。

どこへ行つても親切に説明してくださる中国の方と、内容の悲惨さに、私は自分がどうバランスをとつてよいか、いつもとまどつていた。

とくに七三一部隊跡を見学したときは、平常心を装うのに苦心した。

一步この館に足を踏み入れた時、ここで殺されたたくさんの方の中国の人びとの恨みが渦巻いているのを感じた。

もし、靈魂というものがあるとすれば七三一部隊跡の空間にはたくさんの方の靈魂が漂っていたであろう。

何の罪もないのに名前さえ知られずに「マルタ何号」と符号でしか呼ばれなかつた人びと。その死を家族に伝えることもできないもどかしさ。殺人者は戦後、米軍に守られて、のうのうと生きている。その国から私はとても気軽に飛行機で来て、一流ホテルに泊まり、大名旅行を

続けているのであった。

館内を案内してくれている、日本語のできる年若い職員は「ここでの生体実験資料は、日本の敗戦が決まると、いち早く軍人、軍属が特別列車で新潟県直江津まで持ち帰り、そこで解散しました」と告げた。

その声は冷静で、決して私たちを非難してはいなかった。そうであればあるほど、名もない死者たちが、耳もとでつぶやき始めた。

「貴方は、今こうして旅行を楽しんでいる。人が殺されるところを一度も見なかったのだから人生を送っている。でも貴方たち日本人は、この私を殺したのですよ。何の罪もない私を。ただ、中華民国人だというだけで殺されたのですよ。貴方にはこの無念さがわかりますか？ 平和な生活を送っていた私を拉致して、ここに連れてきたのですよ。生きながら実験台にされて殺されたのですよ。この国全体の死者の数は世界最大ですよ。いまだに数え切れていないのです。貴方たちがそれほど大量に殺戮したことを、貴方たちは忘れても私たちは決して忘れないし、また決して許しはしませんよ」

薄暗い建物の中で死者たちは坤いていた。何百里も離れた日本に向かって叫んでいたとしてもよいかも知れない。私は、打ちのめされた気持ちで外に出た。

秋の陽がしらじらと輝いていて風が頬を撫でたが、私の心はとても悲しく暗澹とした気持ちでいっぱいであった。

(9 条連近畿)

前事不忘、后事之師

芦澤 礼子

前事不忘、后事之師（前事を忘れず後事の師とする）は、中国ではとても良く使われることわざの一つである。今回の旅で、何度もこの言葉が頭の中をよぎった。

『あごろ』二五三号『闇を照らす閃光―長谷川テルと娘・暁子』の編集に携わった縁で、今回、澤田和子さんにお声をかけていただき、幸いにも長谷川テル夫妻の墓参の旅に参加することができた。折しも日中国交回復三十周年を迎える九月、それも九・一八事変（柳条湖事件）記念日をジャムスの墓参の日を迎えるという、非常にタイムリーな日程だった。私は今回皆さんと訪れた都市の中で、長谷川テル夫妻の墓所のあるジャムスは初めて訪れる都市だったが、北京、長春、ハルピンは行ったことがあった。それでも九月に訪れたのは初めてで、以前には感じなかったことも感じるが多々あった。

たとえば長春で訪れた偽皇宮（満州国皇帝「溥儀の皇宮」の入口にある石碑に刻まれた江沢民揮毫の「勿忘九・一八」の文字は、一九九五年に私が初めて来たときにはなかった。偽皇宮の前で舞台をつくる工事をしていたので何の催しか尋ねたら「九・一八の記念のための催しです」と言う。ハルピンでもジャムスでも、九・一八の記念番組のために、私たちのツアーにテレビの取材がついてまわった。そう言えば、一九九四年から九五年に住んでいたことのある四川省成都では、九月十八日だからといって特に行事はなかったように記憶している。中国東北

地方が「満州国」という名の日本の植民地であったことは、中国の他の地にはない深い屈辱感として、この地の人びとの心に深く刻まれていたのだと改めて実感した。それは満州国関係の遺蹟にことごとく「偽」の字を冠することからもはっきりと見て取れる。「満州国」は、まさに「二七ものの国」であったのだ。

ジャムスには満州国時代の遺蹟はあまり残っていないようだが、かつては「靖国神社」もあったそうだ。

長谷川テル・劉仁夫妻の墓所は、市内から六キロほど離れた四豊山風景区という風光明媚な丘の上にある。暁子さんは大学生だった文化大革命中にジャムスを訪れて両親の墓を探したが、その時はすり減った墓石がたぐさんあるばかりで、発見できなかつたそうだ。

一九七二年の日中国交回復と七八年の日中平和友好条約締結のあとで、暁子さんの叔父さん（劉仁氏の弟）の働きかけもあつてジャムス市が動き、一九八三年に整備された墓所が落成した。今ではジャムス市にとって長谷川テル夫妻は市の誇りで、暁子さんも「私はジャムスの娘です」と、副市長さんとの会見で述べておられた。ジャムスの小学生たちがボランティアで墓所を日ごろから掃除し、同時に学習の場となっているという。まさにテル夫妻は小学生たちの「后事之師」と言える。

九月十九日に私はツアーから離れて、四川省で日本語を教えていたときの教え子を訪ねて大連、成都、上海と回り、十月のはじめに北京から帰国した。その合間を縫って、北京では盧溝橋、上海では一九三二、三七年の上海での抗日運動を記念する「淞滬抗戦記念館」を訪れた。盧溝橋の近くにある「中国人民抗日戦争記念彫塑園」は二〇〇〇年、「淞滬抗戦記念館」は二〇

○一年のオープンである。まだ新しい施設で参観者も少なく、日本人一人で参観するのは、かなりの重圧だった。このような抗日戦争を記念する施設が、つい最近になっても新たに作られて続けているということは、未曾有のスピードで経済発展する中にある「侵略された歴史を決して忘れまい」という中国の人びとの気持ちの表れではないだろうか。

振り返って日本はどうだろう。前事不忘どころか、政府は前事を忘れたくて忘れたくてしかたがないようだ。でなければ「有事立法」などという馬鹿げた代物を出してくるわけがないだろう。

暁子さんは旅の途中でツアーのメンバー全員に向けて「私は日本と中国との関係、平和の関係を生活の中でいつも考えている人がこんなにたくさんいるから大丈夫と思います。一人ひとりの考え方がきつと強い力になります」と話された。テルのように生きられなくても、たとえ小さな力でも、戦争を拒否する勇氣を持ち続けたいと改めて思う旅であった。

今回の旅では、長年（あごろ）事務局でお世話になった斎藤千代さんと一緒にでき、また斎藤さんの旧友で一九九五年の北京世界女性会議の際に（あごろ）に多大なご協力をして下さった武漢科技大学の袁晞先生がわざわざ北京に来てくださって再会することができた。これも長谷川テル・暁子さん母娘のお引き合わせだと思ふ。旅を企画された澤田さん、団長の坂井先生、旅行社の西島さん、通訳をされた木田さん、そしてツアーの皆さん全員に、改めてお礼を申し上げたい。

（元（あごろ）事務局）

母に、そして良心に恥じない 生き方を続ける

長谷川 暁子

私の気持ちを話させていただきます。この度の私の父 劉仁と母テル墓参の旅にご参加いただいた坂井先生、木田さん、澤田さん、そしてみなさん心から感謝いたします。

みなさんと一緒に佳木斯にこられたことを、大変嬉しく、父も母もきつと喜んでおられます。

このご挨拶は、明日 お墓の前でしようと思っておりましたが、ここで時間が過ぎましたので、ゆつくりお話をさせていただきます。私は日本語があまり上手ではありませんがお聞きください。

私は母のことは誇りに思っています。母のように立派な人間になれなくても、立派な人、うそをつかない人になれるよう、私は私なりに生きてきました。私はテルの娘としてずっとマスコミに注目されてきました。マスコミは時代にあわせた記事を書きますので、私は好きではありません。中国の難しい時代でも、私はうそをつかないで、自分の良心に恥じない行動をしてきました。

十三歳の時兄と会い、たった一人ではないことがわかりました。しかし、その兄も坂井先生



(テルさんの着物を 東北烈士記念館に
贈呈する前に、初めて袖に手を通した
暁子さん)

に大変お世話になりましたが、五十五歳で亡くなりました。

日本の国民に、テルのような人がたくさんいたら、戦争はおこっていませんでした。戦争はいやですね。母は父の愛情のささえがあつたので、平和になるよう運動ができてよかったです。戦争はいます。

私は日本にきて十年以上たちました。中国でも四十年、私はテルの娘としてではなく、平和のことを考えています。中国の私の友人そして日本のみなさんが平和について頑張ってくださいますので、安心です。ありがとうございます。

(バスが故障した際の発言より・文責澤田)

「旅のスコア」

西原 東洋子

年月は人間の都合など一切かまわず、どんどん過ぎて行く。めでたく私も今年、還暦を迎え過ぎ去った月日の速さをしみじみ感じている。

この度、近代女性史を学ぶ（夕陽丘女性史グループ）が二十周年記念、日中国交回復三十年、そして自分の還暦祝のご褒美に、娘を伴い「長谷川テルを辿る中国の旅」にご一緒した。北京、長春、ハルビン、佳木斯の六日間、母娘とも有意義に過ごさせて頂き喜んでいる。

八年ぶりに訪れた首都北京は本当に変わっていた。中庭を中心に四方建物で囲われた北京古来の住居（四合院）や土塀に囲われた胡同（フートン）の街並み一帯はすべて取り壊され、当時の面影はまったくなかった。北京古来の都風景に変わり、欧米化が一気に進み、超高層ビルやマンション群が林立し、コンビニ・ファーストフード店・スーパーが建ち並び、景観はすっかり激変していた。一番驚いた景観は故宮博物院（もと紫禁城）内の一角に、日本でも流行のアメリカ文化の象徴の一つともいえるべき、スターバックス・コーヒー店（中国名 星巴克珈琲）があつたことである。日本の京都御所内の一角にスターバックス・コーヒー店があるようなもので景観のバランスは余り良くない。

北京は現在、二〇〇八年オリンピック開催に向けて経済発展のためなら、景観に違和感を覚える欧米文化も日本文化も大歓迎の状態。何でもありの雰囲気広がっている様子である。

かつて戦後の日本人が経験した、経済大国日本の、なりふりかまわず突き進んだ時代の姿と中国の現状が重なる。近い将来この地に住む人びとの生活が日本みたいなら、あらゆる問題が持ち上がるのかと少し心配になった。願わくば、時を越えた歴史の力が宿っている建物周辺の景観はバランスの取れた姿で次の時代へ伝えて行ってほしいと思う。

北京郊外にある「万里の長城」では、八年前と同じ日本製のロープウェイが作動していた。内心嬉しかった。その作動する様子を眺めながら、前の訪問の時に坂井先生にご紹介していただいた日中友好の発展に尽くされた故高橋正毅弁護士を偲んだ。ご家族は弁護士の遺骨を長城に撒かれた。どこまでも蛇行する長城のどこでお別れをされたのだろうか。雄大な景色を前に走馬灯のように在りし日の姿を偲び、心から高橋弁護士のご冥福を祈った。また、長城は「月から見える唯一の建造物」といわれるが、人類がはじめて月の世界に到着したのは三三年前（六九年七月）。人類は月に到着できるほど発達をしたにもかかわらず、なぜ国境の枠を取り払えないのだろうか。せめて戦争だけでも止められないのだろうか。月と地球の距離のほら、国と国との距離より短いのだろうかと自問自答した。

一方、中国東北部の長春・ハルビン・佳木斯には、まだ中国大陸のにおいがたくさん残っていることを知った。古い物と新しい物が混在する風景。ギャップの面白さを五感でたつぷり楽しんだ。その土地の人びとの生活感あふれる様子。狭い迷路のような路地で野菜や果物を売るかけ声。道端の軒先で椅子に座ってのんびり日なたぼっこをする老人。店内がまる見えの床屋さんなど、この地は中国の何時代なんだろう。自分勝手に想像してみる。古き伝統に新しいパワーが刺激しあう中国の魅力。尽きることのない発見の楽しみがこの国にはある。中国の旅が、

くせになりそうである。

私は、信念と誇り、勇氣と愛を持って平和を願い求めて生きた革命烈士の御霊に誓った。

日本の、中国の、世界の、かけがえのない生命を守り、自然豊かな地球を築き、永遠の平和を語り伝えるために 地道に努力し続けよう、と。
(夕陽丘女性史グループ)

「失くした二つのリンゴ」を 朗読して

木田 日登美

私たちの一行を乗せた貸切バスは、エンジントラブルで黒龍江省省都ハルビンから佳木斯へ向かう高速道路の途中で突然停止してしまった。エンジンの修理はできず、代わりのバスが来るのに二時間はかかるとのことだった。

あたりは見渡す限りのとうもろこし畑で、はるか遠くに十数戸ばかりの農家があるのが見えた。しばらくして、澤田さんが「みなさんの前で朗読してください」と一遍の詩をもってきた。長谷川テルの『失くした二つのリンゴ』病床にて』であった。この詩は、以前に『長谷川テルと娘暁子』（『あごら』二五三号）に掲載されており、読まれた方も多いと思うが、私も読んでいたので、突然であったが、たいした躊躇もせず、朗読を始めた。

ところが、詩を半ばまで読みすんだ時、私は激しい感情の波におそわれた。当日午前中に見学をした、東北烈士記念館に展示されていた長谷川テルと劉仁お二人の写真の影響もあると思うが、あたかもそこに長谷川テルという、うら若い日本人の女性がマイクروفオンの前に立ち、中国侵略中の日本人兵士に向けて『あなたたちの敵はこちら側にはいません。私を売国奴と呼んでもらっても結構です』と美しい声で放送をしている姿が見えるような錯覚とともに、その透きとおるような、細いけれどもしつかりした声は、長谷川テルの遺児であり、私の大切な友人長谷川暁子さんの声でもあるように聞こえた。

かねて私は、暁子さんの声を本当に美しいと思っていたが、お母さんのテルさんが、一九三四年にNHKアナウンサー試験に合格されていることを『あごろ』誌上で発見して、暁子さんの声の美しさは、母テルさんの形見であつたのかと、深く肯くところでもあつたからであろう。長谷川テルという女性の思想的な見事さは多くの人の知るところとなつたけれど、一人の女性としての凛とした面差しとやさしい心と美しい声を持った、生きた長谷川テルを語れる人はいないだろう。

口はばつたいうようで、申し訳ないが、もちろん私は年齢からもテルさんを直接間近に見たわけではないけれど、私の想像する人とは近いであろうと、東北烈士記念館に飾られたテルの遺影を見ながら感じていた。そして、同時にこの詩を朗読している私自身は、心の中で今は亡き私の母にマイクروفオンを通して語りかけているような不思議な感情に陥り、涙がとめどもなく流れ、朗読をいくども中断してしまった。なぜなら、私もまた、娘の将来を不安がる母に反抗しながら、一途に自分の思う道を進んで来たのであつたからだ。

更にまた、バスの窓の外に限りなく続くとうもろこし畑の中の細い道を、一九四五年八月の中国東北の冷たい雨に打たれながら、とほとほと日本に向かって歩き続ける開拓団の女たち、子どもたちのあわれな一群の姿をも、見たように思った。

私はこの旅で、国際的なエスペランティスト長谷川テルが死の時まで貫き通した中国人の夫劉仁への愛と、彼の祖国中国への愛、また娘として愛する母への思いと祖国日本への愛の深さを知り、それを全人類への愛へと発展、昇化させた過程と自分の生きざまとをあわせて考えることのできる希有の時間を持つことができた。

私がテルの遺児曉子さんと出会ったのは、私が勤めていた大学に彼女が中国語の講師として招かれてしばらくの頃で、彼女はまだ日本国籍が取得できず、劉曉嵐という名前であった。その後一年たらずで逆に私は北京に留学ということで中国に来て、もうすでに十二年が過ぎた。

だから、私と彼女が顔を合わせて語り合うのは年に幾日もないけれど、会うと、たちまちなにもかも知りつくしている旧友のような感情が交流するのを感じる。共通の友人の澤田さんは、最近、「曉子さんはますます日本人的になり、木田さんはだんだん中国人的になる」と言う。本当にそうかも知れない。自分でも矛盾したことであるが、中国において日本のことを悪く言われれば、無意識のうちに日本を弁護し、日本において中国のことを無責任に悪く言う人があれば、熱心に中国人の立場を弁護する。中国の私の友人たちは、私のことを「半中国人」ということがある。半分だけ中国人だという意味だ。

現在私は演出家兼翻訳家及び通訳として、日本と中国の演劇の交流にかかわっている。言語を異にする民族の相互理解のために、文化の交流は欠かせないが、なかでも言葉と身体表現を

ともなう演劇の果たす役割は大変大きいと考えている。

そして、私は日本と中国の両方の立場を思いやることのできる心を持って、これからも、日中演劇交流の仕事を続けてゆきたいと願っている。長谷川テルには及びもつかないが。

二〇〇二年十一月二十五日北京にて

(劇団息吹 演出家)

遙かなる大地を訪れて

西村 雅芳

私は、半年前に澤田さんから「長谷川テル」の墓参を計画したいと聞き「ぜひ参加したい」と即答した。何故なら数年前『望郷の星』のビデオを観賞したときに、荒れ狂う戦争の嵐の中で日本人の一人の女性として強靱な意志をもち戦争に反対し、中国の大地で最後まで、その意志を貫いたことに強い共感をもったからだ。また、それまで「長谷川テル」の存在すら知らなかった自分の知識不足に、恥ずかしいという思いから墓参したいと感じたからでもある。

ビデオでしか知らない長谷川テルをもう少し知ろうと思い、1、『あごら』の特集 2、『望郷の星』3、『テルの生涯』の本を事前に読んだ。

長谷川テルは、一人で中国に渡り、中国語もまともに話せない中で「反戦エスベランティスト」として日本軍に対し、反戦放送を行なった。彼女は、「おのぞみとあればどうぞわたしを裏切者と呼んでくださっても結構です。わたしはこれっぽっちもおおそれません。むしろわたしは

他民族の国土を侵略するばかりか、なんの罪もない無力な難民のうえにこの世の地獄を現出させて平然としているひとびととおなじ民族のひとりであることを恥とします」「みなさん。この戦争に中国が勝利することは、単に中国民族の勝利を意味するだけでなく、日本を含むすべての極東の被抑圧民族の勝利を意味するのです」と述べている。

また彼女は、女性としての、反戦の強い意志と、母親を思う心から、「失くした二つのリンゴ」という詩をつくっている。私は、その詩を読んで「長谷川テル」の強い意志に出会ったと感じた。かなり長い詩だが、すぐさま旅行用のノートに書き写した。また彼女は「みかん」が大好物だったことも知り、墓参に「みかん」を持参した。

旅行は、北京―長春―ハルビン―佳木斯―北京の五泊六日であり、ハルビンでは、侵華日軍第七三一部隊罪證陳列館、東北烈士紀念館に行った。東北烈士紀念館の一角には、長谷川テルの功績と長谷川暁子さんが寄贈した遺品の着物が飾られていた。日本では、長谷川テルは親族や周辺の関係者と、平和運動の人のなかでしか知られていない。しかし、中国では烈士の一人として、大きく評価されている。こうも違うものかと知らされた。

さて、旅行にトラブルはつきものだが、ハルビン―佳木斯へバスで移動中、ハルビンから二時間ほど走ったところでエンジントラブルが発生。バスが動かなくなってしまった。ファンベルトが切れ、オーバーヒートしていたので修理不可能となった。代替バスがくるまで足止めされてしまったのだ。夕刻に予定されていた、佳木斯市副市長等との晩餐懇親会も、お流れとなった。しかし「遙かなる大地」のど真ん中での立往生は、じたばたしてもどうしようもない。

ここはじっくり構えようと、参加者の思いや考えを自己紹介方式で述べあうことになった。

澤田さんの提起で、「失くした二つのリンゴ」の詩を劇団息吹の演出家である木田さんが朗読した。約六十年前に書かれたその詩は、演出家（プロ）をも読み入らせ涙を流させたのだ。

誰からともなく、それぞれの思いや意見を出しあい、明るかった周辺も、いつの間にか日が暮れていた。代替バスが来るまで何と三時間半も経っており、その時間は、あつという間だった。トラブルは参加者の絆を一層深め、大きな思い出としていつまでも脳裏に残ることだろう。

佳木斯のホテルに着いたときは、深夜になっていた。翌日、市庁を訪問、歓迎を受けたのち、は長谷川テルと夫劉仁さんの墓参を行なった。墓は郊外のダムの畔で眺めの良い、小高いところに建てられていた。記念碑も大きく、生前の活動への中国側の評価が実感として伝わってきた。

私たちは花束を飾って墓参りを終え、改めて「憲法を守り、二度と戦争をしない」ことを誓った。

私たちの取り組みは、日中友好三十周年ということと長谷川暁子さんの同行も関係して、中国マスコミで大きくとりあげられた。そして九・一八「満州事変」（日本の侵略）の勃発という歴史的な日にゆかりの地に足を踏み入れたことや、日本国内における有事法制や憲法改悪というきな臭い動きを愁い、戦争に反対し、平和を希求する意志を一層固めたことなど今回の旅で得たものは数多くあり、大きな意義があったと思う。長谷川テルの強靱な意志を我がものにしたいと、思いを新たにしたい。

発意した澤田さん、坂井団長をはじめ参加された皆さんに 謝謝。

（9条連近畿）

失くした二つのリンゴ―病床にて

長谷川 テル

(日光の降り注ぐベランダで、私は今までどおり、月に一度母に「特別な世話」をする)。おかしいわ。いつもなら三十分位で白髪が全部抜けるのに、今日は減るところか、抜けば抜くほど増えていくようだわ。

鏡の中の母は、ひどく疲れているようでじっと黙っている。

「英ちゃん」

突然母は今迄聞いたこともないような、厳しい声で私を呼んだ。

「私が折角お前にあげた二つのリンゴ(赤いほっぺた)はどうして見えなくなってしまったの」

「それは、お母さん……」

私は悲しく、両手で自分の蒼白い頬を押えた。

上海の時はリンゴはまだあったのよ。それからはお母さまも御存知のように、広州にも、漢口にも、重慶にも、どこにもリンゴはなかったから、とうとう私は自分のリンゴを食べってしまったの。

母は何も言わなかった。私も黙ったままで、ただ手を動かすだけ、白髪はどんどん増えて、

頭中が真つ白になつてしまつた。私は我慢し切れずに、

「お母さまー」

答えは返つて来ない。

「お母さま、親愛なお母さまー」

半分怒つて、半分甘えて、その痩せ細つた肩に手を当てて、顔をのぞくと、ああ、お母さまではなくて、冷え冷えとした石膏の像ではないか……。

私は眼が醒めた。

頭の芯はズキ、ズキと、ひどく痛く、胸は汗でびっしょりだつた。

あちらも、こちらも、辺りの灯火は眩しい程に輝いている。

それなのに、母の窓だけが、どうして真暗だろう。

さびしい盲人の眼のように！

母よ！

春の微風が若葉の間を縫つて、サラ、サラと音を立てている。

母の重くて疲れた頭をやさしくなでてくれないかな。

花壇の沈丁華は、真つ暗闇の中で、清らかな香りを放っている。

その香りが、弱つた母の体をそつと抱き包んでくれないかな。

ガラス戸をしつかりと閉め

重いカーテンを下ろして

痩せ細った手を震わせながら

ラジオのダイヤルを回しているのだろう。

母の好きなバイオリンの曲も終り、

ジ、ジ、グーグーグーグー

乱れた訳のわからぬ雑音が飛び込んでくる。

けれど母はすぐに聞こえた。

電波は海を越え、山を越えて、

あなたをよく知っている声が聞こえる。

それは、遠くの娘の声なのだ。

娘は、飼ひ馴らした小鳥が飛び立つように、

あなたの懐から飛び立ってしまった。

毎晩、毎晩、マイクロフォンの前に立ち

その度に「お母さま！」と思わず叫びたい衝動にかられる。

私の体は燃えたぎり、心も裂ける思いだ。

次の瞬間、私の眼に浮かぶ無数の顔、顔、顔。

悲しみ、疲れ、飢え、怒り、恨みのこもった、

男女老幼の顔、顔。

母よ！ 母よ！

私の愛する人はあなただけなのだ。

でも、私はあなただけの者ではない。

この残酷な戦争の中で、

涙と呻吟と呪いの暴風雨の中で、

こっそりと自分だけの小さい幸せにひたることはできない。

「誇りを失った売国奴」と

ファシスト代理人は毒舌をはく。

邪悪で、無知蒙昧で兇悪な視線に取り囲まれて、

母の衰弱した心はますます痛めつけられている。

しかし、母よ、

眼をしっかりと見開いて、「英ちゃん」をよく見ておくれ。

か弱い、苦しんでいる人々に対する熱い愛、

彼等を虐待する一切に対する憎しみ、

掛け替えない宝である「誇り」

これこそ母が私にくれたものだ。

これだけは決してなくしてはしめない。

あなたの娘はなくしてはいけない物をなくしてしまった。

——それは私の両頬の赤さだけだ。

何週間か前、

失くした二つのリンゴを求めて、私はW温泉に行った。

緑の芝生に日の光が燦々と照りそそぎ、

黄金色の菜の花が一面に咲き、

薄紫のそらまめの花が素晴らしい香りを放っていた。

暫し、疲れも忘れて茫然となり、

ああ、もしかしたらここは幼かりし日のK村ではないか。

この野原で母の袖を引き、

飛んだり、跳ねたりして、大声で歌った。

「春が来た、春が来た」

戦争を知らない永遠の天国だった。

しかしそこから余りにも早く離れてしまった。

思い出が樂園から私を追い出させたのだろうか。

北から南、東から西へ この二年は、絶えず流浪した。

母よ、許してくれ、

頬からリンゴがいつなくなったのか、私自身も、わからない。

だが誰がそれを奪ったか、私は知っている。

憎らしい手、それと同じ手が何十万、何百万人の青年男女や子ども達から、

むごたらしくも両頬の赤いリンゴを奪ったのだ。

ここ中国でも、そして私の祖国日本でも。

私も、私たちも、

奪われたものは、取り返すべきだ。

でも、どのようにして取り返すのか。

何もしないで、じっと待つというのか。母よ、

死ぬほど、恐いかもしれないが、

耳をふさがらないで、眼をそらさないで、

激しい戦闘の、溶鉱炉を経てのみ

それらを取り戻すことが出来るのだ。

でも、母よ、

たとえあなたの娘が、

大事にしていた二つのリングを永遠に失くしてしまっても、

叱らないでほしい。

愛する母よ、見ておくれ、

そのリングは、中国大陸で、日本で、世界各国で、

奇麗な赤い、赤いリングを永遠に実らせるために、

先に落ちてしまった無数のリングの中の

二つに過ぎないのだ。

※『嵐の中のささやき』で発表。(一九三九年四月 重慶)

歴史の見方が変わった旅

宮崎 和子

女性史を学んでこられた澤田さんは「長谷川テルという素晴らしい女性がいらしたのよ」と皆さんに伝えるためにエネルギーを傾けておられる。私が長谷川テルを初めて知ったのは、「ピースとおさか」で開催されたテレビドラマ『望郷の星』を鑑賞し、主演女優栗原小巻さんとテルの娘暁子さんを囲んでのパーティで記念撮影をした時であった。

その後澤田さんは『あごろ』発行の『闇を照らす閃光』に取り組まれ、私はこれも読み、そして、たくさん購入し、友人たちに勧めた。この夏又エックのワークショップで「長谷川テルをご存じですか」のお手伝いもした。そのご縁で今回の旅に山口さんを誘い、ご一緒した。

中国東北部はすべてが初めて。聞き覚えのある名称は、旧満州、満鉄、ハルビンなどであった。佳木斯は知る人は知る地名であるが、私にとっては初めての場所であった。飛行機、汽車、バスを乗り継ぎ、やっとたどり着いた。中国大陸の広大さを充分味わった。「満州国」建国の政策とともに、遠隔の地に新天地を求めて大勢の日本人が移住して行ったようである。

五七年前の人生の一ページの場所、旧満州を懐かしんで旅する人たちにも出会った。その人たちはハルビン止まりであった。佳木斯に足を延ばす人は少ないようである。

戦争が終結した時、故国に辿りつきたい一念で、荒涼とした行けども行けども変化のない道を歩み続けられたのであろう。幼い子どもを現地で預けていった親たちの何とも悲しい気持ち

を思うとき、黒龍江省、吉林省という地名を耳にすると、中国残留孤児という悲劇を今深く考えさせられる。

私は一九九五年の「世界女性会議」にも参加したが、戦後五十年ということで現地は盛り上がっていた。北京の「中国人民抗日戦争紀念館」は、人形でその状況も再現されており、戦争の痛ましさを感じた。小学生も大勢先生に引率されて見学に来ており、加害国民としてつらかったことを今もはつきり覚えていいる。

今回七三一部隊館を見学、建物と展示物に身の震える思いがした。平和の時には個人の死は悲劇として扱われるのに、戦争で万単位の大勢の人が死ぬのは……本当に悲しくつらい。

平和を願い提唱された長谷川テルの尊い思い、生命を慈しむ思いは、どのように世の中が変化しても変わるものではない。湖畔の高台にあるテルと劉仁ご夫妻の墓前にぬかずき、皆で合掌した。平和のために貢献された碑文を、同行された木田さんが朗々と読み解いてくださった。

長谷川テルさんは、上海から重慶・ハルビンと点々と移動をされ、この佳木斯で、活躍を目前にして、新しい中国の建国を見ることなく永遠の眠りにつかれた。

大きな歴史の流れを垣間見ながら辿った旅。参加させていただいて本当によかったと思う。「こだわらない心」を「こだわらなければ」にさせられた旅であった。歴史の一面だけでない取り組みをしなければと改めて考えさせられた旅でもあった。

感性豊かな皆さんと一緒にさせていただいたことに感謝している。(あごら大阪・OWI)

長谷川テルを辿る旅に参加して

宮本 兼次

9 条連・近畿世話人の澤田和子さんから、長谷川テルさんを辿る旅に行きませんかと誘われた。「長谷川テル」と言われても、その当時は「長谷川テル」のことはほとんど知識のない状態で、自分自身の仕事の関係もあり、参加を逡巡していた。

参加を決意したが、何も知らないでは他の参加者に申し訳がないと思い、学習資料をお願いした。送られてきたのが、『あぐら（二五三号）』であった。表紙を見て、大きなインパクトを受けた。メガネの奥から何かを睨み付けるような眼で、「お望みならば、私を売国奴と呼んでくださってもけっこうです。決しておそれません。他国を侵略するばかりか、罪のない難民の上にご世の地獄を平然と作り出している人たちと同じ国民に属していることのほうを、私はより大きい恥としています」と信念に満ちた長谷川テルの顔写真と文章が掲載されていた。

テルは何故ここまで信念を持って反戦運動ができたのか？ テルの文章の中にその動機がうかがえる。「多くの日本人には中国人を軽蔑する習慣がある。彼らは中国人を下等な人間のようながめるのだ。家畜以下の苦力クワリと摩天楼の住人との関係で、誰も苦力を人間とみなさない。彼らが死んでも、飼い主のいない犬のように運びただけである」と、偏見や差別を問題にしている。テルの根本思想は、「民族は絶対的なものではない。それはただ、言語、習慣、文化、皮膚の色などの相違を意味するだけである。私たちはお互いを『人類』という一つの大家族の

兄弟であると考えています」と言い切っている。だから「日本帝国主義者やファシストには、全生命を賭けて闘い、また全世界に反ファシズム闘争のために、すべての力を合わせましょう。私たちの周囲に統一戦線を広げていきましょう」と、鳥肌が立つような言葉を発信している。戦争ができる国になりつつある日本の中にあつて、侵略戦争を憎み、永遠に平和であるように闘い続けるために、テルの不屈の闘志の一端でも学べたらと思つて参加をした。

「侵略戦争はなかつた」「南京虐殺や慰安婦問題はなかつた」と有識者の中から発言や報道がされている。また歴史の事実を歪曲し、過去の侵略戦争を歴史の事実から葬り去ろうとしているのが現在だと言える。昨年、韓国の元「従軍慰安婦」の方がたが共同生活されているナムムの家に行き、今年ハルビン近郊にある七三一部隊記念館と部隊が使用した建物を見た。以前、森村誠一さんの『悪魔の飽食』を本と映画で見た。映画は正視できないほどの内容であつたが、それを裏づけるなまなましい資料が展示されていた。これは映画ではないんだ、実際、我が日本人がここで人間の仕業とは思えない人体実験をしたのだと思うと、ナムムの家でも感じたが、同じ日本人としてなんともいえない虚しい気持ちになつた。これでも「虐殺はなかつた、慰安婦は存在しないと云えるのか」と怒りと腹立たしさがこみあげてきた。

自責の念が重たくのしかかつている気持ちが和らいできたのは、ハルビン市内の「東北烈士紀年館」に行ったときであつた。全館と言つていいほど、内容は日本軍の侵略に対する抗日戦争当時の事柄であふれていた。

別フロアのコーナーに革命烈士「緑川英子」のコーナーが二面あり、写真と遺品が展示されていた。

日中戦争当時、日本は全土をあげて戦争モードであり反対するものは非国民と罵られ、刑務所に入れられた物言えぬ暗黒の時代であったと言える。日中戦争たけなわの一九三八（昭和十三年）、当時の漢口から中国侵略中の日本兵士に向けて「あなたたちの敵は、こちら側にはいません」と訴えていたテル。反日放送をすることは、日本にいる両親や兄弟に対する生命の保障もないようなことだと言える。内面は計り知れないが、テルは最後まで己れの信念を貫き通した。私ならどうであつたかと自問自答した。

参加者の多くが初対面だったが、日程が進むにつれて親密感が出てきた。バスの故障で三時間半立往生したとき、苦況にうちひしがれることなくバスの中が自己紹介の場になり、それぞれの思いや考えが報告された。テルの「失くした二つのリング」を木田さんが朗読された。また、有元さんが親父は何故「赤紙」を破り戦争に行くことを拒否しなかつたのかと涙ながら報告をされた。このことは、今でも忘れられない光景であつた。

私たちは、中国の広大な大地をしっかりと踏みしめてきた。日本軍の侵略の爪痕や、七三一部隊の存在と悪魔の行為をしっかりと刻み込んできた。過去、日本は他国を侵略したにも関わらず、また、過去を反省することなく北朝鮮の核開発や拉致問題をナシヨナリズムの鼓舞に利用し、「有事法制」の法制化を図り、憲法改正へと一気に政治日程を進めようとしている。すでに自衛隊は戦闘地域に派遣され、憲法は有名無実となつている。いまこそ平和を希求する労働者や市民グループ、女性の皆さんと手を携えて行動を起こすことが、長谷川テルの求めたことであるし、今回の「テルを辿る旅」の意義であると思う。皆さんの活躍をせつに望む。

反ファシズムを貫いた 「長谷川テル」に逢う！

宮原 達

JR西労の田村委員長から今回の旅の簡単な説明と参加を呼びかけられた。当方も「当時こんな人がいたのか」と軽い気持ちでOKしたのであるが、その後『あごら』を送付してもらい、読んでいくうちに、彼女の闘い＝生きざまに感銘し、勇んで訪中の旅に参加したことを思い出す。

『あごら』を頂いて、長谷川テルさんの著作「晩秋の別れ」から読み始めた。そして愛する劉仁の待つ上海に上陸したとき、苦力たちの生きざまと彼らが建てた摩天楼で暮らす人びとを比較し「上海の街は好きになれない」と両断している。この一文だけで「この人は違う！」と直感した。

彼女の鋭い洞察力、ヒューマニズムと労働者の感性などを兼ね備えた一文に感銘し、一気に作品集を読破していた。

『あごら』を読み終えて身震いのようなものを感じたことも事実である。彼女の行動の源泉として、確かに、劉仁という愛する人も大きな力にはなっていたと思うが、あの厳しい時代に

エスペランティストとして反ファシズムを貫き、中国の地で生涯実践していったという現実は、普通の人にはできることではない。今まさに当時と同じ状況下の中で、自らにできるかと問いついた時に、深い感動が身体の中を通り抜けた。

今回の中国の「長谷川テル」を辿る旅は、同じ志を持つ人たちばかりで、その意味では楽しい旅であった。しかし、大戦当時の日本帝国主義者の犯した罪は当然許されざるものであり、この現実を今後も日本の地でさらに広めて行かなければならない。それと同時に、これらの現実には敢然と闘ってきた長谷川テルの生涯が、中国において国際戦士として称えられている現実を見て、私も、残る生涯、平和を求めて「抵抗とヒューマニズム」を貫いてゆこうと、あらためて決意したところである。

またこの旅に、長谷川暁子さんが同行されたことで、「長谷川テル」をより身近な人として受け止めることができた。暁子さんは、旅の途中での感想で、「母のような人がたくさんいたら戦争はおきない」と述べられたが、すべての参加者から「長谷川テル」の残した意義を受け止め、平和を希求していく決意が次つきと述べられ、感動した。

今回の旅の意義に踏まえ、今後自らが平和を希求していく行動の一環として何をなすべきか考えた。そして元職場の仲間の中に「長谷川テル」を知っている人が少ないことを知り、私の拙い文章力でどこまで表現できるか心配であったが、「テル」の生涯をまとめ、多くの仲間配布した。また『あごら』の宣伝を少ししたことと付け加え筆を置く。

(9条連 広島)

意義ある旅の体験

山口 鞞絵

私が子どもの頃、母に「兄は満州事変、私は支那事変（南京陥落）のあった年に生まれたのだ」とよく聞かされていた。国民学校に入る頃には物資が乏しくなり、三月の大空襲で一家は丸裸となり、二年生の夏に終戦となったが、何を言っているのかわからない玉音放送を聞き、これで戦争は終わったと、一家は無事であることにほっとした思い出がある。

今回、中国へ行くことにはちよつと勇気がいったが、今、地元で日本史の学習をしており、これから現代史を習うので、いいチャンスと思ひ、参加した。

北京国際空港は「日中国交回復三十周年」による混雑、北京の街は広い道路と建築ラッシュ、スローガン、団結の多さに、社会主義國の雰囲気を感じた。

長春の偽皇宮には入口に「勿忘 九・一八 江澤民」の碑があった。「許そう、而しわすれない」と言ってくれた中国。毎年巡ってくる九月。これは私たち日本人に向かって叫ばれているのだと、心に深く受け止めた。侵略Ⅱ終戦、偽滿Ⅱ建国、虐殺Ⅱ陥落、敗戦Ⅱ終戦と言いくるめて許されるはずはないではないか。

ハルビンの東北烈士紀念館で抗日運動の犠牲者の中に反戦エスベランティスト長谷川テルが顕彰されている。日本ではどれほどの人が知っているのであろうか。

七三一細菌部隊罪証陳列館では、ガイドの方が「貧乏国の原爆に代わる究極の兵器」と云われたことにドキッとした。「テロは究極の……か」と思った。

日本人は都合の悪いこと、いやなことはすぐ忘れようとするが、「迷惑を掛けた、遺憾であった」で済むものではない。現実を直視して認めるしかないのではないか。

長春からハルビンへの列車の中で、斎藤千代さんと同席になった。それまで私は「カワイイおばあちゃん」と心の中で呼んでいたのだが、一緒に旅をした友人の宮崎さんから「世界中どこへでも一人で出かけられ、長年『あーら』の編集をしておられるすごいお方」と聞き、びっくりした。車窓から見える夕陽に思わず『ここはお国を何百里、離れて遠き満州の』と口ずさみ、「これ他の人に聞かれたら、ひんしゆくものやねえ」と言ったら、「あれは厭戦歌だそうです。日清・日露でつくられた軍歌は、全部短調でしょう。『どこまで続くぬかるみぞ』『梅干し一つ』など、みんな苦しみと哀しみを歌った厭戦・反戦の思いをこめたメッセーじだったのに、いつのまにかその意味が忘れられ、今の軍人は戦争賛歌と思いきんでいる、と、父は日中戦争の頃、嘆いていました」と教えていただいた。

佳木斯市では副市長をはじめ市の職員の方が私たちの心ばかりの手土産も笑顔で受け取ってください、同行されている長谷川暁子さんのご両親、劉仁・テル夫妻の墓地まで送迎をしてくださった。墓地は美しい丘の上であり、その待遇にテル夫妻がいかに大切にされているか知り安堵した。

帰路、バスが松花江沿いをゆっくり走っていたところ、松花江を見下ろす場所に日本といわくありそうな碑が見えてきた。帰国してからテレビで知ったことだが、ソ連軍に追われた日本

人たちが逃避行の途中、この河を渡りきれず力つき亡くなった子女たちの痛恨の碑であることを知った。

国交回復を待つて中国に残留した孤児たちを捜す親たちが、「何を今さら」と腰を上げようとならない日本政府に失望し、直接中国大使館に掛け合い、再会が実現された。

我が国は戦争の加害と被害を体験した。敗戦後今まで戦争と飢えのない時を続けてこられたのは『憲法九条』のおかげだと思う。このことを世界にアピールしなければ次の世代に大きなツケを負わせることになる。草の根の市民運動を下から突き上げねばならない。戦争へ向かう準備の有事法案を許してはいけない。

長春と佳木斯では朝市に出かけた。ちよつと横道に入ると道路は悪く、辻々にはゴミの山。店も清潔とはいえないが下町の活気があった。「上海から？」と聞かれ「日本（リーベン）」と返事してアツと思つたが、別にいやな顔はされなくほつとした。揚げ菓子を買つて食べたがおもしろかった。

今度北京盧溝橋に近くにある「抗日戦争紀念館」と南京へも、歴史認識をもつて訪れたいと思つている。

経済交流も大切、でも中国も日本も、軍事大国になるよりも核を持たない人権大国になつてこそ、世界に顔向けできるのではないか。北京・長春・ハルビン・佳木斯と、点と線で結んだ移動であつたが、中国大陸の大ききの片鱗を満喫した。名所巡りではない意義ある旅を体験できたことに感謝。

(大阪府寝屋川市から参加)

「戦争」を問う旅

斎藤 千代

お金もない時間もない極限状況の中で、旅を想うだけでも無理だった。にもかかわらず行きたかった。

長谷川テル——その名前は、しかとは覚えていないが、日中戦争中、果敢な反戦行動をした日本女性の話は、少女の頃から私の記憶になぜか刻まれている。そのテルさんの軌跡を遺児の暁子さんとともに訪ねる旅。二度とこのような好機はないだろう。この旅に情熱を傾け続けてきた澤田さんの志にも応えたかった。

私は旧友の袁晞さんを誘った。周恩来と共に日本に留学した中国の知識人を父とする袁さんには、四分の一、日本人の血が流れている。日中友好に奔走した父上は、漢奸として投獄され、袁さんのきょうだいも皆、下放の中で言語に絶する苦勞をした。「それでも私は中国を愛する」と、二十年前、非公開、録音を禁じての袁さんの〈あこら〉でのお話しは、私がこれまでの生涯で聞いた、最も感動的な話だった。その袁さんは、「日本人の残虐を物語る資料館を訪れるたびに、居たたまれない思いになる」と、手紙に書き綴ってくださったこともある。十五年戦争中の日本の残虐を訪ねるこの旅は、つらいものになるかもしれない。しかし多くの中国人に囲まれて、ただ一人、複雑な気持ちで観るのと違って、反戦

の志を貫いたテルの遺児と共に訪ねる日本軍の旧跡めぐりは、それまでの衰さんのつらさと悲しみを、もしかしたら中和することになるかもしれない。

衰さんからは、「ぜひとも参加したいが、すでに高齢で、その時にならないと体調がわからない」という返事が来た。

出発前日、植木鉢の支柱を左目に突き刺した。激痛の中をたずねた眼科医院の院長先生は九十歳。吉岡弥生門下の、旧女子医専（現・東京女子医大）の出身。「外国旅行はとても無理」という若い先生を遮って、「チャムス？ 佳木斯ですね」と、てのひらに漢字を書いて、「行ってらっしゃい。満州にはいい病院がたくさんあります。必ず毎日病院に通って治療を受けるのが条件」と、どっさりの抗生物質と鎮痛剤を渡しながら、「私は大連生まれ」と、微笑んで私の背中を押してくださいました。

この旅に心が傾くもう一つの理由は、「日本の戦争」についての、六十年間にわたる私の疑問である。学校で、「慰問袋をつくってこい」と言われたことを伝えたとき、温厚な父がサツと顔色を変え、「学校は戦争をやめさせる先頭に立つべきところ。戦争に協力せよとはもつてのほか。私の娘に慰問袋はつくらせません」ときっぱり拒否した。から手で登校した私に制裁も叱責もなかったのは、父が巻紙に筆で書いた長文の手紙の効果だったと思う。「そんなことをすれば憲兵隊に引っ張られる」が常套語になっていた当時ではあったが、手紙の趣旨に、先生も内心では賛成してくださったのかもしれない。

「支那事変」が始まって以来、父母の会話はそれに集中し、公の席でも両親は果敢に発言

を続けた。軍の暴走に、最後まで体を張って抵抗した庶民の意志は、しかし流れを変えることはできず、ついに亡国に至った。「戦争に敗れるほか軍部を倒す方法はなかった」と、戦争で全財産を失った父が、さばさばといった言葉が忘れられない。

「日清・日露」の頃は、「日支」の時代には考えられないほど反戦を広言できたという。それでも「日支事変」は始まり、「アジア太平洋」に傾斜した。そして今、憲法九条を持ちながらイラクをあらゆる口実とあらゆる力で侵略しようとする米国に、ノーと言えない日本。「あの戦争はなぜ起きたのか。軍の暴走をどうして止められなかったのか」——一九四五年以来抱き続けている疑問に、ひと筋の光が射すかもしれない。

旅に向かう一行は、職業も年代も多様だったが、「戦争を問う」という軸は一つだったと想う。

*

北京会議の打ち合わせに訪れた九四年、その本番で奔走した九五年。これまで二度の私の訪中は、世界女性会議に終始し、訪れたのは盧溝橋に近い抗日戦争紀念館だけだったが、今度の旅は、優雅な故宮見学に始まった。通り抜けるだけで二キロはある旧紫金城を駆け足で回りながら、私は、かつてこの城内にこもって清朝の歴史的資料を書き写した父のことを、否応なしに思い出していった。

父は、一九〇五（明治三八）年、日本海海戦勝利直後の六月に、朝日新聞の主筆として活躍していた内藤湖南氏と、門司から大連に到着。旅順、二〇三高地、水師營、奉天の、歴戦の跡のすさまじさを見て、九月、北京に入り、翌一九〇六年の一月まで、紫金城内で資料の筆写に明け暮れた。同じ一九〇六年の七月、再び大陸に渡り、奉天・北鐵嶺開原・

威遠堡門・東京城の史跡を調査し、また〇八年には間島から河東・敦化・長嶺子・小狐家子等、吉林奥地に至る邦人未踏の地のフィールドワークで、清朝の榮華から東北辺境の想像を絶する極貧までを心に刻み、広大な中国大陆と、その多様な文化に深い愛情を抱くとともに、「日清・日露」の「勝利」の真実も知ったようである。

二〇三高地のすさまじい脂臭。暖房のない紫金城内での筆写の苦勞。清朝の官吏の学識の深さ。吉林奥地での馬賊の跳梁と住民の貧困。茶碗にご飯を盛るとたちまち真つ黒に蠅がたかり、どうしてもものに通らなかつたのを、「胡麻だ」と思って、のみこめるようになったなど、幼時から、断片的に耳にした話の数かずが一度によみがえり、父が日本軍の「支那」への侵略をあれほど憤っていた気持ち、初めて深く受け止められた。

*

翌日からは旧満州に入る。訪れる先はすべて旧関東軍の悪事の検証である。みんな寡黙になり、一つの施設を出ることに、黙って空を仰ぐ。知識として知っていたことと現実との落差は、限りなく重く大きい。

一方、その軍隊の現実を知らず、「新天地」に嬉々としていたであろう多くの日本の庶民の姿……。

満州と言えば「農民」が浮かぶが、長春やハルピンは、夢のような美しい都市だ。それを築いた帝政ロシアの榮華は、二〇世紀の後進国、日本にとっては、それこそ期待の星だったのであろう。西欧諸国の使い古しの列車を利用させられるために三・六フィートの狭軌を強いられていた日本国有鉄道。働いても働いても、冷害のたびに女の子を売らなければ

ばならない日本の貧しさ悲しさを、人びとは四・三フィートの広軌・満鉄に託したのだろうか。そこから始まった西欧帝国主義の路襲。

*

佳木斯にたどりつき、湖のように広い松花江の岸部に立って、溺れる人も多かったという引揚者の話を、私はこれまで「話」としてしか受けとめていなかったことに胸が痛んだ。河を渡るだけでも容易ではない。それから更に何千キロを、砲火と住民の憎しみにさらされながら逃げまどった人びと。「引揚者」と、今も政府は呼ぶが、労働力として呼び集められ、棄てられた「棄民・難民」の苦しみを、どれだけの人が理解しているだろう。

戦後五十七年、満州棄児の親や親戚の再会は、今ではほとんど困難になっている。サーカスに売られた子、生涯無償の性の対象や労働力として買われた子。その数さえも未だ把握されていない。国家補償を求める声がようやくあがり始めたが、若さも未来も夢も奪われた代償は、億という金をもらっても報いられるものではない。その一方、七三一部隊の幹部は、機密のすべてを米国に渡して、東大教授となり、製薬会社の社長となった。その製薬会社、緑十字は、HIV発症の原因となった血液製剤をつくり、売り続けて巨利を得た。

戦争でもうける者は誰で、失う者は誰か。日本人は、「あの戦争」の本当の仕掛け人を戦犯として告発し得ず、その「犯罪者」の一部を神として靖国にさえ祀っている。そして中国や韓国が、なぜ「靖国」に怒るのかさえ理解しない。その日本人は、軍需産業の発展のためにイラクを「悪」とする国の欺瞞にもノーが言えず、地球は「武力を持つ強者」の支配

のままになろうとしている。十五年に及んだアジア太平洋戦争をずるずると許した過ちの根源をきつちりと問わないかぎり、そしてテルの、あの捨て身の告発を骨の髄まで受けとめないかぎり、イージス艦をきつかけに、日本は、またも戦争推進国になるだろう。

*

ダム湖に浮かぶ丘の上のテル・劉仁夫妻の碑は、巨大でしかも美しかった。その美しい碑面を、亡き父と母をいたわるように、やさしく撫でつづける暁子さんも、秋風の中に美しかった。もしもテルさんの行動がなかったら、九・一八のこの日、私たちは、もつといたたまれない思いだったに違いない

記念館に飾られていたテルさんの和服姿が浮かんだ。上品で上質な着物が似合う方だったのだろう。最愛の日本の家族までも捨てて、より多くの人の死を必死で防ごうとしたテルさんは、自身はもとより家族さえも投げ出せるほど、限りなくやさしい方だったのだろう。いま、この重い淀んだ日本を、世界を、切り開く道があるとしたら、それぞれが我が身を投げ出す無限のやさしさしかないだろう。

私は暁子さんに言った。

「三十初めで、人が百歳まで生きてもできないことをなさった。その方を追って三月後にはお父様も同じお墓にお入りになった。世界一、おしあわせなご夫婦だったのですね」

「私もそう思います」

暁子さんは、きつぱりと答え、にこやかにうなずかれた。秋の水を満たして、ダム湖は小さな波を光らせていた。

(あごら事務局)

旅行業に携わる者として

西島 善治

二〇〇二年九月十一日に発生した米国同時テロの後に、二十八年間勤めた会社が解散・精算することになり、お客様のご支援を頂戴し、新会社を設立することになった。テロ、戦争は旅行業界に常に甚大な被害をもたらし、一瞬のうちに闇と化すほど、旅行業界は典型的な「平和産業」なのである。しかるに業界は大手が先導して平和運動に携わるとか、草の根運動を定期化するなど、やるべきことは数多くあるものの、どの企業も無関心そのもので、いつこうに手を付けようとはしない。

澤田和子さんと知り合ったのは数年前であるが、〈夕陽丘女性史グループ〉や〈九条連〉（あごら）で平和運動をライフワークにされていることは、正直言つて知らなかったのである。同氏が主宰されている異業種交流会での会合時に私が起業したことをお話しすると、『長谷川テルを辿る中国の旅』を永年の勉強の総仕上げとして企画している旨おうかがいし、ご用命いただいた。当社に対しご支援いただいたのである。私はその温かいお言葉に感動し、少しでも総仕上げのお手伝いをせねばと動きだした。

団の募集活動、中国側との日程、手配の調整など、私にとっては日常の業務の延長であるが、その間の同氏の熱意は、ほんくらな私にもひしひしと伝わり、何が何でも成功させなければいけないという使命感をもたらした。

幅広いネットワークとご自身の事業で培われた経営感覚に基づきご指示は完璧で、私も経営者の端くれとして大いに勉強させていただいた。

仕事から海外へ頻繁に出かけてはいるが、観光、視察先以外は知識も浅く、中国旅行の手配専門代理店でも「長谷川テル」の名前は知られていないのが現実である。私にとって今回の旅行で得た体験は、今後ますます増え続ける中国ビジネスを伸展させてゆく上で、たいそう貴重なものであった。過去の忌わしい歴史的事実、その歴史のなかで生きてきた中国国民の心情など、旅行業に携わる一員として、旅行者に直接的、間接的に訴えてゆかねばならない使命である。

日常化した海外旅行、単なる物見遊山より脱皮し目的を明確に打ち出した旅行を創り上げてゆきたい。観光旅行をもとに、個別の勉強、生涯学習、そしてボランティアなどへ移り変わり「旅」を人生のテーマとするお手伝いができることを、我が社の理念として今後の企業活動を邁進してゆきたいと願う毎日である。

最後になりましたが、バスの故障に際しましても毅然として受け止めていただいた皆様方へ感謝いたしております。ありがとうございました。近い将来にまた一緒に旅行できることを楽しみにしています。

(株式会社トラベルアイ代表取締役)

旅を企画して

澤田 和子

私がなぜ長谷川テルに取りつかれたか

それは、一九九一年のある日、親友の木田日登美さんから長谷川暁子さんを紹介されたことに始まる。長谷川テルが有名な人であったなら、私は、こうものめり込まなかつたであろう。

知る人ぞ知る長谷川テルがなぜこのように知られていないのか。日中国交回復十五周年に制作されたテレビドラマ『望郷の星』、その後、日本テレビの「知ってるつもり」でも取り上げられたが、ほとんどの人の記憶にはない。そういう私も知らなかつたのだから、えらそうなことは言えない。知らなかつたから知りたいという思いがつのり、著作や文献を集めた。暁子さんからも大切な本をいただいた。私の本棚の長谷川テルのコーナーにはたくさん資料が集まつた。

私は知ったことをそつと自分の胸に閉じ込めていることができなくて、この素晴らしい女性をもつと大勢の人に知ってもらいたくなり、行動をはじめた。九四年、当時（ピースおおさか）の事務局長だった有元幹明さんにお願ひして、栗原小巻さんを招いていただいた。大成功であつたので、それ以後有元さんより「仕掛け人」とニックネームを頂戴した（ちなみに私の携帯の着メロは「仕掛け人のテーマ曲」である）。そして、それが、一九九九年九月に発行した

『あこら二五三号 闇を照らす閃光―長谷川テルと娘・暁子』につながったのであった。

『あこら二五三号』は、二〇〇二年十月二六日の『東京新聞』の記事「抗日に生きる」に紹介された(ちなみに一九三八年の「嬌声売国奴」を書いたのはこの新聞社の前身である)。九九年十二月には平和・協同ジャーナリスト基金の運営委員会賞もいただいた。友人たちがたくさん購入してくれて、宣伝をしてくださったり、(あこら)の会員になってくださった方もあった。いろいろな場所で、テルについて語る機会も得た。友人の紹介で大阪市教育委員会(北市民教養ルーム)での、平成十二年度成人大学講座「地球を結ぶ女性たち・戦前編」の講師の一人に選んでいただき、長谷川テル「闇を照らす閃光」とのタイトルで二時間語らせてもらった。暁子さんが花束を持って来て下さり感激した。とてもうれしいことであった。そして、J R西労の女性たちの会(星砂の会)が広島で、(ウイン女性企画)の「歴史でみる男女共同参画社会」が名古屋で、それぞれ私を講師として語らせてくださった。

旅の実現に至るまで

九二年に東京・大泉学園前で劇団・演劇工房が『ヴェルダ・マーヨ』を公演することを聞いて、テルの若き日に交流のあったエスペランティスト宝木武則さんと見に行つたことがある。その帰途一人で横浜の港に行つた。「テルが劉仁のもとに行くためこの港から船で出発したのだ」と感慨深くしばらく港に立っていた。そのときからいつか終焉の地・佳木斯に行つてみたいと考えていた。

「日中国交回復三十周年」――二〇〇二年に実現するしかない、「長谷川テルを辿る中国の

旅」の企画を立てた。坂井尚美先生にご相談をして、帰国されていた木田さんと暁子さんと三人で、知人の旅行会社トラベルアイの西島善治社長を訪ね、行きたいところを数か所ピックアップしてお願いをした。(私たち三人は年に一、二回木田さんの帰国にあわせて出会い、おしゃべりする。二つの国のことをよく知っておられる二人の話を私は楽しんで聞いている。)

西島さんから企画書が出され、当初は佳木斯への墓参を先にと思っていたが、現地の交通機関の事情で最終地が佳木斯となった(このことが現地では九・一八事変の前日十七日にハルビン訪問、当日十八日の墓参となり「革命烈士の遺児と共に日本より平和運動団体が来た」とマスコミが殺到したことにつながる)。

企画書をもとに、友人、知人に百二十通ほどの案内を送付した。『あごろ』『9条連ニユース』にも宣伝文を書いた。私の強引な勧誘に、〈9条連近畿〉も応援してください、JR西労の田村委員長と西村さん、宮本さん、広島の宮原さん、そしていつも忙しい有元さん、女性は〈夕陽丘女性史グループ〉の西原さん母娘、〈あごろ〉会員の宮崎さんと友人の山口さん、そして同じく〈あごろ〉の斎藤千代さんと苧澤さん、〈9条連近畿〉会員の橋本さん、さらに木田さんの友人の岩田さんと、やっと参加者十七名が確定したのが八月中頃のことであった。

この間いろいろな出来事があり、この号の「あごろ読書室」に紹介文を書かせていただいた竹内治一医師のご長男も急ぎよ参加をしてくださることとなり、男性七名女性十一名、合計十八名の参加者が決定、坂井先生に団長をお願いした。トラベルアイの西島さんも添乗員として行ってくださいることになり、デジカメの撮影を引き受けていただいた(その写真を帰国後すぐにプリントアウトしていただいたので展示に役にたった)。西島さんにとっては初めての平和ツ

ア—で、途中から添乗員兼お仲間として加わってくださいました。

長谷川テルの着物

六月に日頃から平和運動でおつきあいのある保険医協会の雑誌の座談会に、暁子さんと木田さんを紹介したのが縁で、その座談会の端に私もだまって座らせていただいた。竹内医師の司会で、京都大学に客員教授として留学されているハルピンの黒龍江省社会科学学院の、笱志剛だ先生が加われ、「日本と中国の戦争と交流」の話になった。

その時、八月に東北烈士纪念馆の副館長が来阪されると聞いていた。暁子さんに「テルの遺品を提供してほしい」と依頼された。暁子さんは大切な母親の着物を贈呈されることになった。この着物は暁子さんが初めて日本に来られたときに、叔母さんから「お母さんの形見の着物」として貰われた大切なものである。これはぜひ伝えたい話なので、この号の巻頭言を書いていただいた岩垂さんに相談したら、大阪朝日の若い記者を紹介してください、記事になることが決まった。八月十三日、盆休みに取材したいと連絡があり、急きよ坂井先生の事務所に暁子さんが着物を持って来られ、撮影することになった。しかし、今までマスコミの勝手な報道に困らされていた暁子さんは「絶対に写真はいや」と言われる。着物だけというのも変なので、坂井先生と私が写ることになった。

この記事が十六日の朝刊に大きく掲載され、朝日新聞に問い合わせが多くあり、坂井先生の事務所や私の所へも電話で問い合わせがあり、長谷川テルのことを知る人が増えたのは有難いことであった。またこの記事は、asahi.com 朝日国際版にも掲載された。

八月二十九日、東北烈士紀念館の副館長が、「ピースおおさか」を訪問されることになったので、有元さんのご尽力でこの時に着物の贈呈式をさせていただくことになった。お母さんの大切な着物を手放す暁子さんの心情を思い、贈呈の前に袖を通して貰った。色の白い暁子さんにとてもその着物は似合っていた。きつとテルさんは母親として喜んでおられるだろう。いろいろな人の巡り合わせにより、テルの着物が東北烈士紀念館に展示されることになった。

再度の中国訪問

前述の竹内治一医師の『赤い夕陽と黒い大地』がハルビンで出版されることになり、お誘いをいただいたので、「長谷川テルを辿る中国の旅」から帰国後、もう一度中国へ行くことにした。先の旅は事務局をして、精神的に非常に疲れたので、今度はのんびりしたいと、西島さんに飛行機と宿の予約を取って貰った。一人ではちょっと心配なので、カメラマンの息子を誘い十月二十六日大連へ着いた。また木田さんに通訳をお願いして二泊大連に泊まった。旅順、二〇三高地などの戦跡を見学した。

二八日にハルビンの黒龍江省社会科学学院で竹内先生の一行と合流した。この日は『赤い夕陽と黒い大地』の出版記念とこの著作による功績と、竹内先生が以前から中国東北部の要塞調査に取り組んでおられたことへの功績が認められ、黒龍江省社会科学学院から名誉研究員(名誉教授)の称号も同日授与された。

翌日、笹志剛先生の案内で再び七三一部隊侵華罪証陳列館を訪問した。館内の説明を聞いた後、先の旅では見ることでできなかった、外にある当時の建物や壕も見学できた。一緒に説明

を聞いていた日本の訪問団の人たちが壕の前で献花をされていた。その献花に岡山県と書かれてあったので、「菅先生」と声をかけたら、岡山の宗教育家の方たちで、名詞を交換した。宗派を問わず「平和と人権」を守る運動をしておられて、竹内先生の故郷が岡山であり、不思議なご縁だということで、帰国後竹内先生は本を贈られた。

続いて東北烈士記念館も訪問。長谷川テルの展示をゆっくりと見た。中国での通名「緑川英子」の横に（長谷川テル）と書いてほしいと坂井先生が願っておられたので、副館長に木田さんに通訳をお願いしていたいてお願いした。今改装中なので、新しく展示変えをしたときはそのようにするとお約束をいただいた。同行された菊地実・関東軍国境要塞戦跡研究会代表の話によると、来年八月東北烈士記念館の展示品展が、京都の立命館ミュージアムで開催されるようである。ひよっとすればテルの遺品も帰国して、展示されるかも知れない。

テルの意志を継いで

十月五日、大阪の憲法九条を運動の柱に据えている三団体（憲法会議・大阪、憲法九条の会 関西、9条連近畿）が合同で有事法反対の集会を開催された。ここで私は「長谷川テルを辿る中国の旅」の報告と旅の写真の展示もさせていただいた。会場にテルの母校奈良女子大の学生が来ておられ、テルが奈良女子高等師範を退学させられたことに憤慨し、「そのようなすばらしい先輩がいたことに感激。十一月の学園祭に『あごら』二五三号の販売をするので」と注文まで貰った。テルと娘暁子さんの後輩の学生たちに知っていただいたことは、これも非常に嬉しいことであった。

こうして長谷川テルは少しずつ皆さんに知られるようになった。テルの研究家の利根光一氏も、『望郷の星』の脚本を書かれた岩間芳樹氏も亡くなられた。どこの空港であったか、宮崎さんが、他の団体の女性たちに「私たち長谷川テルの墓参に行きましたのよ」とテルのことを説明したおられる声が聞こえた。『9条連ニュース』九五号に田村豊さんが「長谷川テルの魂にふれて」、芦澤礼子さんが『軍縮問題資料』二〇〇三年一月号に「長谷川テルの墓を訪ねて」として寄稿文を書いてくださった。特に若い方が語ってくださることは非常にうれしい。参加してくださった人たちがそれぞれにテルを語ってくださるだろう。そして今回のこの特集が発行できたら、もつと多くの人たちに知ってもらえるだろう。私は仕事の余暇に多くの時間をさいて運動したが、一次的な役割は終わったと思う。

私は長谷川テルを語るときいつも「失くしたふたつのリンゴ」の詩を参加者のどなたかに読んでいただく。なぜ私が読まないか？ それは、私が泣き虫で何度読んでも涙がでるから。今回もどなたかに墓前で読んでいただこうと思って用意をしていたら、バスの故障で木田さんにお願ひすることになった。プロの頬にも感動の涙がつつた。この詩のリンゴを二つ、私は旅行バッグの真ん中にそつと大切に入れて日本から持って行き、墓前に供えた。テルさんの頬を赤いリンゴの色に戻してあげたかったから。私には墓前でのお晧子さんの顔にテルさんの顔が重なり、ほつとされたお母さんの顔が見えた。もう私はこの詩を朗読するとき涙は出ないだろう。

佳木斯の劉仁・テルの比翼の墓は、劉仁は故郷本溪を、テルは日本の方向に向けてであると聞いていた。お二人は深い愛で結ばれて平和を望み、短い命をこの地で終わられた。碑文に刻まれている「国際主義戦士」とは、中国では、中国人民と共に闘った外国人に捧げる最高の称

号である。いまもあのすばらしい景観の中で、世界の平和を望んでおられるだろう。この感動を大切に平和な世の中の実現をめざして力を合わせて運動をしましょう。

「長谷川テルを辿る中国の旅」に参加された十八名の方、ありがとうございます。この号の発行をすることに決まり、また、皆さんに無理なお願いをして申し訳なく思っています。皆さんの文章を読ませていただき、「長谷川テル」のことを深く知っていたいただいたこと、これからの平和運動に役立つ旅であったことを確信しました。晁子さんご苦労さまでした。

二〇〇二年十二月八日
（あごら大阪 9条連近畿 夕陽丘女性史グループ）

次号は『ノーと言おう日本人』です

強引な世界制覇志向の前に、イラク侵略が始まるうとしています。

日本とアメリカの平和友好は大切です。だからこそ、「憲法九条を持つ日本」は、

「ノーと言うべき時」には「ノー」と言わなければならない。

あなたの思いをハガキに書いて、あなたの「メッセージ」を送ってください。

アメリカの女性、世界の女性への発言、アメリカの政治家、日本の首相や議員への発言、

そのほかあて先はご自由に。

〔送り先〕〒一六〇一〇〇二二 東京都新宿区新宿一―九―四 あごら編集部

取材中の疑問から生まれた連載

佐藤 圭子

(大阪民主新報記者)

大阪では一九九九年春の知事選挙期間中、再選を目指したタレント知事が選挙アルバイトの女子学生にセクハラ事件を起こした。権力を利用した性犯罪に対し、人間として許せないと立ち上がった女子大生の勇氣と世論が、強制わいせつ罪という前代未聞の不祥事による知事の逮捕、辞任へと追い込んだ。

この問題で街頭インタビューをおこなった時、もちろん知事を批判する声が大半を占めたのだが、複数の女性から、「男とはそういうもの」「セクハラと行政は別」「タレントのままやったら問題にならなかったのに」などの答えが返ってきて、あ然とした。そう答えた本人が、もしも被害の当事者だったとしても同じように考えられただろうか。知事の行為に対して彼女たちを「寛容」にさせるものとはいったい何なのだろう。そんな疑問が「性」の連載を企画するきっかけとなった。執筆者は人間と性、教育研究協議会メンバーで、府立高校社会科教員の金子真知子さん。思春期まったただ中の高校生たちと性の問題を学びあってきた人だ。二〇〇〇年春から一年間に渡る長期連載「人間の性と生」ヒューマン・セクソロジー」が実現した。

一回一回のテーマは実に多面的だった。子どもたちの性行動や性意識の実態、思春期、障害者、高齢者の性、同性愛など、様ざまなセクシュアリティ、避妊のたたかいの歴史、性の起源、子宮内で胎児が生物進化「三十五億年の歴史を体現している様子、性的役割分業と母性神話、日本の性教育史や性教育先進国スウェーデンの実践、「従軍慰安婦」問題、薬害エイズと戦争犯罪「七三一部隊」との関係……。

中絶や援助交際の是非を問う生徒たちの討論など授業風景も織り込みながら、「性」をめぐる人類

社会の歴史と現在の到達点を踏まえて展開される話は大きな反響を呼び、思春期の子を持つ親を中心に、高校生からお年寄りまで多くの読者から感想が寄せられた。社会や人間の発展への限らない信頼に裏付けられた先生のメッセージに、私自身、何度も目を開かされる思いがした。人間を含む生物の歴史が私たちの体と性に刻み込まれていること、長い間、権力による支配の道具にされてきた「性」を民衆の手に取り戻し、自分の体の主人公は自分自身と捉えることの大切さなどなど。

連載中、学校や地域の教育懇談会、女性医師の会などからも金子先生への講演依頼が相次いだ。女性のことを理解するために読んで欲しいという男性教員、毎号、親子で読んで欲しいという女性、連載を切り抜いてゼミの教材に使っているという大学教員もいた。

「性」は、個人レベルでは極めてプライベートな問題だが、つきつめると女性解放、人間解放の根源でもあり、男女平等、民主主義、平和の問題とも深く結びついている。自分の体の主人公は自分自身という考えは、社会発展の主人公は権力者ではなく民衆という考え方にも通じると私は思う。

昨年、厚生労働省所管の母子衛生研究会が作成した中高生用の性教育冊子『思春期のためのラブ&ポディ』を、いくつかの県が回収、焼却、絶版にする騒ぎがあった。一方、大阪市では、草の根の子どもセンター建設運動を展開している中高生自身が、医師の協力を得て「性」のホームページを作る動きも生まれている。異性、同性問わず、人間同士が対等に、快適に、安全に、より豊かな生活を送るために、性の問題をタブー視せず、大人も子どもも学び、語り合える環境を築いていきたいものだ。そんな中で、セクハラをはじめとする人権侵害をなくし、それを容認する意識も克服していけるのではないかと思う。

ぐるーぶ紹介 ① 戦争を許さない女たちのJ R連絡会

この会は、J R総連の女性組合員、書記、家族で構成されている。それぞれの会が自主的に活動するグループの繋がりで、労働組合の縦系列だけではなく、ちよつと違う色合いも兼ね備えている。家族が中心のグループ、書記が中心のグループもある。そして年々広がりができ、組織内では女性協議会も一緒に参加するようになっていゝ。各地方ではそれぞれのグループが地域の仲間と連帯しネットワークをつくっている。

た。まず東京で〈エンジェル〉が結成され、その後〈星砂の会〉(J R西労)が結成された。そして一九九三年十二月に全国のグループを結ぶものとして〈戦争を許さない女たちのJ R連絡会〉が結成され、翌年一月には、「広げよう九条と平和のこゝろ 女たちのピーストレイン」という平和集会を開いたが、多くの反対のなか、小選挙区制法案は国会を通過した。そしてさらに〈ななかまどの会〉(J R北海道労組)、〈おりづるの会〉(J R東海労)、〈背空の会〉(J R貨物労組)、〈ロザリオの会〉(九州)など、つぎつぎとやさしい名前の会を結成するなど、〈労組〉のイメージとはひと味違うユニークな活動を展開している。

昨年(一九九四年)の9・11以降は、九月二十日に平和集会を開き、「テロにも報復戦争にも、日本の参戦にも反対」要請書提出、国会前座り込み、有事法制反対のデモ、アフガニスタン難民支援のためのチャリティーコンサート、パキスタンでの難民支援活動、「慰安婦」問題の早期解決のための署名集め、などなどのさまざまに取り組みを続けている。

たとえば〈エンジェル〉は、五月の有楽町マリオン前のリレートーク以来、駅頭での有事法制反対のピラ配りとトークを月一回続けるなど。各地域では、いろいろバラエティーに富んだ平和活動をして、『いのち輝く』というミニコミ紙を二か月に一度発行している。

イラク危機が深まるいまは平和の連帯が更に必要なとき、彼女たちももっともっと輝いて、平和運動の中心にならるだろう。(澤田和子)

ぐるーぶ紹介 ②

中国残留婦人交流の会

中国残留孤児の肉親探しは年々困難の度を強めている。山口県にある〈中国残留婦人交流の会〉は会員数は六百名。発足十四年を迎える民間の団体。中国に残留する邦人と帰国者との交流をはかり、日中友好に寄与することを主たる目的で設立され、現在まで、多くの残留女性の一時帰国と永住帰国の世話をしている。

作家の武田英子さんの紹介で、九四年にその総会で長谷川暁子さんが「私の生き方」として講演された。それが縁で会員となり、毎年大阪を訪問されるとき、暁子さんとお手伝いをさせていただ

ている。坂井先生、有元さん、(星砂の会)、伊勢市の山村ふささん(テルの後輩)にもご協力をお願いしてきた。ある年のこと、海遊館を案内したとき、ペンギンやじんべい鮫には興味を示さず、カニとカメのコーナーに来たとき突然「もしもし亀よ亀さんよ」と歌い出された。あの東北部の海の見えないところで五十数年過ごされたこと、子ども時代のこと、蘇られたのであろうと胸が熱くなった。中国東北部に、戦前国策で開拓団として移り住み、敗戦のとき、日本の軍隊から遺棄された人たちは、日本に向けてあの広い中国を

苦難の逃避行を続けた。ハルビンから佳木斯に向かうバスの車窓から見えたあの延々と続くとうもろこし畑の中も歩かれたのであるうか。途中多くの方が亡くなったという。中国人に助けられその地に残った人たちは、政府の二〇〇二年度の調査によると七〇四名だが、自分が日本人であることを知らない人も多いと想像される。

国交回復三〇周年を記念する『平和の鐘』制作カンパには暁子さんや(9条連近畿)の方たちも支援、十月一日に山口県の瑠璃光寺と中国方正県日本人公墓の双方に設置された。毎年十月に全国での帰国者を招き、「永住帰国者の集い」が開催されている。(澤田和子) 連絡先 千七五三〇〇七七 山口市熊野町三一五九 山田忠子方 (中国残留婦人交流の会)



『赤い夕陽と黒い大地』

竹内治一著

(日本僑報社刊)

この小説は大阪保険医雑誌に連載されていたもので、著者の竹内治一氏は耳鼻咽喉科の開業医である。あらずじは、一人の少年が家が貧しく上級学校に行くことができない。親戚の青年が「満州」の炭鉱会社において、会社内の工業学校設立に関与した。その学校は卒業後成績が優秀な

らば、新京工業大学の受験を認めるという規定があった。上級学校へ進学できるはずのない少年は、チャンス到来と、両親の止めるのも聞かず一九四〇年満州へ渡る。この当時多くの日本人は「満州国」がきちんとした国家だと思っていて、また、政府はそのように国民を欺いていた。

少年は批判力もなく当時の東安省の滴道にある満州炭鉱教習所に入學した。学問ができることを唯一の楽しみに勉學に励んだ。三年で教習所を卒業し、炭鉱会社に正式採用された。また、大学受験ができる専検(大検)も合格した。しかし、関東軍の横暴、資源の大量奪取など中国人へのむごい仕打ちは少年の目にも異様にうつりはじめた。日本の敗色が濃厚になり、ソ連の攻撃が始まると、関東軍は自分たちだけ逃げ、住民を置き去りにした。少年たちは力を合わせ、住民を助け、脱出する。

この「少年」は著者がモデルであり、六年六か月の出来事を物語にしたものである。数多くの文献から当時の厳しい様子が書かれている。今年には日中友好三十年であり、この本は十月二十八日、中国ハルビンで出版された。中国語と日本語とが一冊の中に収容されて同地で出版パーティが開催されたことに意義がある。そして、中国語に翻訳されたのが、日本の京都大学へ客員教授として来日されていた若き研究者、笠志剛先生であり、また、氏は竹内先生が以前から中国東北部の要塞調査に取り組んでおられたことに感銘を受けられた。これらの功績により、著者は黒龍江省社会科学院から名譽研究員(名譽教授)の称号も同日授与された。ぜひお読みいただきたい。(か)

(A5判) 1800円+税)

「連絡先」〇四八・四三二・七三三二

(株) 日本僑報社

『永遠の隣人』

人民日報に見る日本人

主編 孫東民

副主編 于青

監訳 段躍中

(日本僑報社刊)

A5判、五九五ページのずつしりと重いこの本は、中国を代表する新聞『人民日報』が日中国交回復三十周年記念として、一九七二年から二〇〇二年四月まで掲載された日本および日本人に関する『人民日報』掲載記事を約百五十編集めた書籍『永遠の隣居』の日本語翻訳版である。

内容は、日本の旅・文化の世界・友好への思い・誠意と信頼の交流・実質的な貢献をした人びと・往事に思いを馳せて・歴史の変遷・人生物語・先達の冥福を祈るの九章にわたっており、それぞれのジャンルで、

どういう光景、どんな人物が紹介されているかを見るだけでも興味深い。

政治家では「えつ」と思うような意外な人物が高く評価されていたりして、日本のメディアではなかなかわからない中国側の見方がわかっておもしろいが、その半面、政治家や文化人、財界人などの誰もが知っている著名人ではなく、農業や工業などの専門分野で「知る人ぞ知る」貢献をした技術者や、一般庶民同士の交流などのエピソードに、両国の友好における三十年間の人的交流の厚みと、今後のあるべき姿を感じ取ることが出来る。

しかし、『人民日報』で最も大きな紙面を割いたであろう靖国訴訟や教科書問題、中日戦争の後遺症などの記事はほとんどない。日中友好三十周年を記念して「友好」に重点を置いた編集だけに、あえて割愛されたと思われる。しかし、そういう中国

人のホンネこそ、日本人が読むべき素材だったのではないだろうか。「永遠の隣人」が「真の隣人」であるために、第二弾として「日本に対する問いかけ」が編まれることを期待したい。

(A5判 4600円+税)

(千)

『女性問題の「根っこ」を考える』

かつしか女性会議有志

しまようこ編

(BOC出版部刊)

「親業」や「子育て」の講演や講義には多くの女性が参加するが、「女性問題」の講座に足を運ぶ人は少ない。まして、講座が終わったあとも学習を続ける人は珍しい。

この本は、東京・葛飾区を生活の、あるいは仕事の間とする女性たちが、区の主催する講座で学習したあとも、自発的な学習の場を続けてきたグル

ープ（かつしか女性会議）の活動の一つを、ありのままに集録した記録集である。

「お互いを尊重し、ゆるやかな共有のルールのもとにジェンダー問題にとりくむ」（かつしか女性会議）は、現在、会員約百二十名。そのどの人でも「こんな話をしたい」と思っていた人が合図して始める。この指とまれ企画を続けている。その一つとして、昨年七月から続けられた『女性問題の「根っこ」を考える』の話し合いを、修飾を加えずそのまま発表した記録集が、この本である。

内容は、それぞれの参加者の独自の疑問を基に、自在に話が展開する。語り合ううちに、話題が拡散するのは自然なこと。一人の発言に刺激されて別の視点に気づいて深めるきっかけになったり、その時には納得したようでも、次回までの一か月の間に疑問符が湧いたりしながら、どんな話題も、ジェンダー問題の、そして政治や国際問題の根っこにまでつながっていることを、本当の意味で理解していく。簡単には納得してもえれない「ジェンダー」「女性問題」を学ぶ方法として、こんな見事な方法があったかと、一年間の「ありのまま」の記録に、読み手は深い感銘を受ける。

これは囚習がいまだに強く残る東京の下町の記録だが、全国どの地域の読者が読んでも共感することは多いだろう。とくに女性問題の学習会にかかわる方には必読の書。ぜひ一読をすすめた。

(千)

(A5判 184ページ)
※非売品ですが、(あごら)の会員に限り、実費1500円でお頒ちします。振替東京〇〇一〇〇〇一〇一五二六四 B〇 Cあごら編集部へお申し込みを。

〈あごら読書室〉への新着図書紹介
内野久美子著『自分を表現して生きる』
勉誠出版 1400円

大田昌秀著『有事法制は、怖い』
琉球新報社 1905円

佐竹京子著『軍政下奄美の密航・密貿易』
南方新社 2000円

大羽綾子著 婦人労働研究会編
『平等と平和を求めて働く女性』
ドメス出版刊 3100円

木瀬慶子さんは〈戦争を許さない私たちのJR連絡会〉の代表をされている。仕事はJR総連の書記である。〈あごら〉は一九九九年からの会員だが、「非常に優秀な方」と、大阪の澤田さんから、いつも聞かされていた。

ときばき話され、細かいところに始終気を使われている人」と、以来、何かの話のついでに「木瀬」さんの何名前が出て、私もいつのまにか「知人」のような気分になっていた。そのご本人にお目にかかったのは、

入った。

そのリレートークを『あごら』二七七号に掲載させて頂いたのがご縁で、直接の関係も急に深まっていった。私はかつて自分が関わった出版労組の経験から、心理的に「労組ざらい」になっていたが、労組員にも、いろいろな方がいると、心を洗われた。

〈あごら〉の危機に際しては、何百冊もの『あごら』を買い上げてくださり、会員もたくさんふやしてくださった。「人に信頼される人」こそ、会員をふやし得る方だと、日々、学ばせて頂いている。

平和や人権を守る運動に全身でぶつかっておられる木瀬さんは、ご自身の父上の介護を続けておられることも知り、ますます敬愛の思いを深めている。職業と運動とご家庭との「三立」のご苦労話を、いつか『あごら』誌上でご披露頂きたいと願っている。

(斎藤千代)

あごらめいと

さわやかで頼もしい 憲法の守り手

木瀬慶子さん



澤田さんと木瀬さんのご縁は、〈九条連近畿〉の世話人を引き受けた澤田さんが、東京で開かれた〈九条連（憲法九条を守る連絡会）〉の会合で、「一緒に始まるという。」

二〇〇二年の五月、有楽町マリオン前での有事立法反対リレートークのこと。澤田さんの賛辞のそのままの方で、「笑うと目が三日月のようになる」という話もそのとおり。笑顔が何とも言えず美しい方だと感じ

語りかけたいあなたへ 49

大里知子

ため息

知らず知らずのうちに、浅い呼吸をしているためなのだろうか、息苦しいとまではいかないのだけれど、なんとなく胸のあたりがいつぱいになるような感じがして、「フーッ」と、ため息のような深い息をすると気持ちが良いので、最近は何んとうに無意識にため息をするようなことが多くなってきた。

一人でいる時なら、何回ため息をつこうと何をしようとおかまいのだけれど、誰かのいる前でため息をつくると、相手に不快な感じを与えると思いつつも、人の前で「フーッ」「フーッ」と、深い息をしている。

私は、いつもヘルパーの人たち三人の介助で入浴をしている。その時に、思わずこの深い息をしてしまったのだ。

「知子さん、ため息をどうしたんですか」と、たちまちヘルパーの人たちに言われると、なんとなく都合が悪くなって、「女のため息よ」と、少し甘くなやましく軽く聞こえるように言っ、その場をなんとか切りぬけた。

別に、大きな悩みを抱えているとか、ヘルパーの人たちに不満があつてのことではないので、ほんとうにバツがわるい。

大湯リハビリ温泉病院の小笠原真澄先生にお会いした時に、ため息のことをお話ししたら、先生もため息をしては周囲の人たちから、ひんしゆくをかつているとのこと。でも、ため息をついて酸素を体内に取り入れることは身体に良いことなので、「おおいにため息をつきましょう」という結論になつたのだつた。

大きく息をはくことは、大きく息をすいこむことに結びつくので、身体にたいへん良いと言われている。

甥の健も、丹田呼吸（腹式呼吸）法は、しばらくお預けにして、せめてため息に似た深い息で、体内に酸素をすいこもうと考えている。

みなさんも、差しつかえないところで、思いっきり大きくため息をついて見てください。

（Eメールアドレス fusen@abeam.ocn.ne.jp）



ストップ・イラク攻撃 女性たちが新聞広告

『あいら』次号は「ノーと言おう日本人」

新年早々、アメリカのイラク攻撃の姿勢は、ますます露骨に。これに対応して「有事立法」、さらに「イラク新法」の動き。

「戦争では決して平和は訪れない。百万を越える難民が発生、アフガニスタンのむごい冬の再現です。しかもアメリカは国連決議を無視して、パレスチナ侵攻を続けるイスラエルは擁護。これは二重基準にはかならない……。だまっていたのでは、既成事実が次つぎにつくられていく。女性が声をあげよう！」

石井礼道子、瀬戸内寂聴、羽田澄子さんほか、多くの女性たちが資金を出しあつて新聞に意見広告を出すことになりました。参加費は一口三千元。郵便振替で一月二十日までに送金を。

氏名の公表を遠慮される方は、その旨振替用紙に記して左記。
〇〇一七〇〇〇七一八三〇五ファミ・ポリテイク編集部。

通信欄に「イラク攻撃に反対する意見広告の会」と明記してください。

酒井啓子さんのイラク情勢解説、ダグラス・ラミスさんの「ローバルな視点からの平和憲法を」、バーバラ・リーさんの「運動は一人から始まる」など。二八〇号と同時進行で編集をすすめています。(あいら)の皆様の、「私はノーと言おう」メッセージを一月末日までお待ちしています。ハガキでもFAXでもメールでも結構ですから、どしどしご意見を。宛先は、

一六〇〇〇二二 東京都新宿区新宿一―九一六あいら

FAX 〇三―三三五四―九〇一四

E-mail XLV05467@nifty.com または boo@mb.infoweb.ne.jp

松井やよりさんが「女性平和資料館」を呼びかけ

重いがんで、告知を受けた松井さんが、長年すすめてきた「慰安婦」関係、国際法廷関係の資料を中心に、「女たちの戦争

と平和資料館」をつくらうと、十一月に呼びかけ、十二月二十七日に急逝されました。その志を継いで、資料館を完成させようと、多くの女性がさっそく一億円キャンペーンを始めました。◆ジエスター正義の視点に立ち、戦時性暴力に焦点をあてる。◆被害だけでなく加害責任を明確にする。◆過去・現在の資料の保存、公開だけでなく、未来へ向けての活動の拠点にする。

◆国家権力とは無縁の民衆運動として建設・運営する。◆海外へも情報を発信し、国境を越えた連帯活動を推進する。◆五つの理念。「女性たちが過去の戦争を記憶・記録し、未来の平和をつくる」が合言葉です。

資料請求先は、
〒一五〇〇〇三一 東京都渋谷区桜丘町一四一〇一―二一
募金の振込先は、

郵便振替 〇〇一一〇―二五七九八―四「女たちの戦争と平和人権募金」(関連記事は(あ)らの(あ)ら)に。)

今年も統一地方選。知事選は十九都道府県

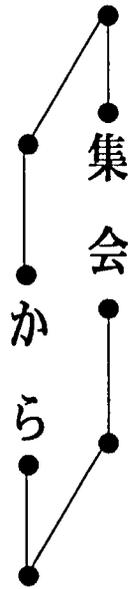
女性の進出が国会よりもさらに低調な市町村都道府県。今

年こそはあらゆるレベル、あらゆる地域で女性を進出させましよう。堂本知事にならって、都道府県知事を！市長・区長・村長にも、どしどし女性を押し出し、無投票地域をなくしましょう。(あ)らの会員で地方議員の方も多いと思います。二八二号は「地方選に女性を」を予定しています。全員当選を目指しますので、抱負・資料など、至急編集部まで送ってください。

東京都に初の女性区長

議会等には女性の進出が比較的進んでいる東京都だが、区長への立候補は過去も少数で、一、二回善戦した例はあったが不発に終わった。十一月二十四日の新宿区長の改選で、三人の候補者の中から保守系無所属の中山弘子さん(五七)が当選。東京都初の女性区長になった。

中山さんは群馬県出身。一九六七年日本女子大社会福祉学科を卒業、東京都に入り、労働局・港湾局・生活文化職・清掃局等を経て、人事委員会事務局長、監査事務局長となり、自民党の出馬要請を受け、立候補した。「実務に長じた東京都のキャリア・レディとして、区長職も、そつなくこなしている」と、現在のところ評価されている。



日米地位協定改定と 損害賠償法制定を考える合同会議

在日米軍の軍人・軍属による事件事故が後を絶たない中、被害者の救済を求める（米軍人・軍属による事件被害者の会）が十二月二十三日、那覇市で「日米地位協定改定と損害賠償法制定を考える合同会議」を（米軍人・軍属による事件被害者を支える会（関東・関西））と共に開催し、約二十名が参加した。

（被害者の会）代表世話人の海老原大祐さんは兵庫県在住だが、一九九六年二月に沖繩の大学に進学予定で宜野湾市に在住していた息子の鉄平さん（当時十九歳）が米軍人の運転する乗用車にはねられて死亡し、その時に初めて日米地位協定の不平等さを痛感。正当な賠償を求めて同年四月に提訴し、他の被害者に呼びかけて（米軍人・軍属による事件被害者の会）を結成した。（被害者の会）で闘った裁判は四件でいずれも公務外の交通事故

による死亡事故であった。民事訴訟として闘って勝訴はしたが、加害米兵自体は一円も払わず免責同然。一九九五年十二月のSACO合意によってアメリカ側の見舞金と判決額との差額を日本政府が負担することになったが見舞金よりも差額のほうが圧倒的に多いという結果に終わっている。これでは米軍人軍属による犯罪は減らないのではないかと、（被害者の会）は実質的に被害者を救う「損害賠償法」制定を提案し、地位協定の改定と並行して運動を進めている。会議では、資料に基づいて海老原さんが事件事故の数と補償の実態を資料を交えて説明。実際は提訴自体が非常に少なく、提訴をしないように防衛施設局が仕向けている現実が浮き彫りになった。またSACO以降米軍人個人の家用車の任意自動車保険加入が義務付けられたにもかかわらず短期にしか入らないため契約切れが多いなど、SACO合意自体の実効性にも疑問を呈した。国会で損害賠償法制定に力を尽くした照屋寛徳前参議院議員の発言に続き、現役の沖繩県選出議員として、島袋宗康参議院議員、赤嶺政賢衆議院議員、東門美津子衆議院議員がそれぞれ決意を表明した。自民党では県選出の地下幹郎衆議院議員が中心になって地位協定改定の議員連盟が作られているが、自民連との連携の可能性もさぐるという方向性が出された。

（被害者の会）はお金目的だと平和運動側からも言わ

れることがよくあるが、それは違う。被害者が救済を求めるのは人間として当然であるし、加害者が償うのも当然。加害米兵が償わなくてもいい状態は米兵にとつても良くない」と言う海老原さん。米軍基地撤去はもろろん究極の目的ではあるが、加害米兵にも責を負わせる制度づくりをすれば、米軍犯罪の大きな歯止めになるのではないか。

(あ)

2003年統一地方選挙キャンペーン 地方から政治を変える―「長野モデル」を全国へ

二〇〇三年は統一地方選挙の年。無党派市民議員のネットワーク(虹と緑の五〇〇人リスト)は、十一月十七日に東京・代々木のオリンピック青少年センターで、統一地方選挙キャンペーンのスタートイベント「地方から政治を変える―『長野モデル』を全国へ」を開催した。

〈虹と緑の五〇〇人リスト〉は一九九八年に発足し、「地域からの」環境政策・公共事業コントロール・男女平等政策・福祉サービス・教育政策・安全保障論・経済雇用政策を七つの基本政策として掲げている。司会を担当した東京都議の福士敬子さんは、集會冒頭に「無党派・一人会派の議員の命は政策です」と断言。そのあと静

岡・長野・徳島から元気な活動報告が相次いだ。

今回のメインゲストは、六月に長野県議会で不信任決議を出されながら、八月の選挙で県民に圧倒的な支持を受けた田中康夫長野県知事。田中氏は有名な脱ダム宣言に関して「ダム建設は県外の大手ゼネコンを潤わせるだけで地域のためには決してならない」ことを、自らパソコンを操作しながらわかりやすく説明した。新世紀を捉えるキーワードとして「物質主義から非物質主義へ」「成長から成熟へ」「他律から自律へ」「集中型から分散型へ」の四つを挙げ、長野県での産業と雇用の創出のために「水直し・森直し・道直し・田直し・街直し」を掲げて、脱公共事業で地域を根本的に豊かにしていく方策を語った。流れるがごとく…ではなく、とつとつと語る田中氏に、意外と地に足のついた自治体首長という印象をもった。

この日、地方選立候補予定者の参加は約五十名。壇上で一人ひとりが短い挨拶をして、来たる選挙での勝利を誓い合った。女性が約半数を占め、二十、三十代の人も目につき、皆とても明るい笑顔だった。

〈虹と緑の五〇〇人リスト〉の統一地方選での動きは、もしかしたら台風の目になるかもしれないと思わせる集會だった。今後の動きに注目したい。

(や)

◆ホームページは <http://www.nijimindori.org>

女性運動誌「あいら」

瀬戸際の
廃刊回避

フェミニズムの視点でこの三十年、女性の地位向上に関する動きや政策などを紹介してきた女性運動誌の草分け「あいら」が、財政難などによる廃刊の可否を購読者に尋ねたところ、全国から激励やカンパが相次いでいる。編集部では「まだ女性の目線で発信する情報が必要とされている」と存続を決めた。

月刊誌「あいら」の創刊

は一九七二年。米国で始まったウーマンリブの波を受け、国内でも女性運動が盛り上がりを見せた時期だった。現在、全国に約千人の購読会員を抱え、約二千部を発行する。

東京・新宿に事務局を置いて、記事の編集は全国十数か所の拠点が持ち回りで担当するというスタイルが特徴。十一月発行号では、富山のグループがDV(ドメ

「原点に立ち返って発行を続けていきたい」と、バックナンバーを前に話す齋藤千代さん



スティック・バイオレンス)被害者支援の最前線をリポートするなど、女性の地位向上の動きや実態を追い続け、評価も高い。しかし、資金繰りは苦しい続いた。購読者の減少が懸念されている。購読者の減少が懸念されている。購読者の減少が懸念されている。

者、事務局長責任者の齋藤千代さんが今年十

めないで」「会費を二倍払う」などの励ましやカンパが相次ぎ、「新会員を確保した」など、うれしい知らせもあった。これまでに届いた約百六十通のほとんどが存続を願う声だったため、事務局では発行を続けることを決めた。

齋藤さんは「期待の大きさを改めて感じました。差別がなくなり、誰もが伸びやかに生きることができると社会を目指してまだまだ頑張りたい」と意欲を新たにしている。問い合わせは、BOC出版部(03・33354・394)へ。

読者の激励、カンパ相次ぎ

「あーら、ガンバレ！」

（あーら）の皆さん。遅ればせながら、あけましておめでとうございます！

岡本恵子は、日高幸子・酒井明世と共に、香川の地・丸亀で元氣いっぱいパワフルにやっております。日高は市役所総務部で現在『自治基本条例』に取り組んでいます。

酒井は『丸亀市男女共同参画プラン策定委員会』の会長をやっています。で、ワタシ・岡本は、酒井の検討委員会の委員やら、二つの市民グループの代表をやっております。その関係で、丸亀市で男女共同参画に取り組む市民団体ネットワークのお世話も。それと、昨年は香川県男女共同参画審議会の公募委員に当選（？）しました。また、丸亀警察署・警察協議会の委員もやっています。更に、面白い事に丸亀市特別職等報酬審議会の会長に就任しました。チョットした巡り合わせなのですが、市では初

の審議会女性会長だとか。世の中も少しずつ変わり始めているようです。

千代さんを丸亀にお招きしてからの、ここ十年ほど、『丸亀トリオ』はなんだかんだと行政に関わって男女共同参画を進めようと頑張って参りました。結構長い間市役所に取り憑いていたのと、これまで講師でお招きした市場恵子さんや高橋ますみさんを初めとする皆さんが素晴らしい方ばかりだったお陰で、我々が呼びたいって推薦する方ならフリーパスになりました。そうやって、あーらで巡り会った仲間たちに公私ともにお世話になって、今の自分があるんだと感謝しております。

また、離れて会えない方やお目に掛かったことのないあーらメイトの方々とも、『あーら』を通して繋がっているように感じていて、いつも元氣の元を戴いております。

昨年、278号で『あーら』を

どうしようかと提案された時も、絶対続けて欲しい！って叫びたかったのですが、遠隔地で何のサポートも叶わぬ自分を省みると、大変なご苦勞を強いるだけの無責任な表明を出来ずにおりました。にもかかわらず、279号で続投のお知らせを受け取り、どれほどホッとしたことか。

地方で細々と活動する私のような者にとつて、『あーら』は故郷のような存在だと感じております。迷った時の道標であり、困った時の教師であり、嬉しい時の友であり、戻って行きたい親なのです。本当にありがとうございます。

とは言いまして、編集の方々・千代さんが更なるご苦勞を重ねる事になったことは、暢氣な私にも判っております。くれぐれもお身体をお大切になさって、大変になったら早メ早メにHelp！を出して下さいね。

強風吹き荒ぶ不穩な世の中でも、

みんなて手を繋いで、何とか真っ直ぐ立っていきましょう。

こんな言葉を聞いたことがあります。

『夢のあるものは希望がある希望のあるものは計画がある計画のあるものは目標がある目標のあるものは行動がある行動のあるものは実績がある実績のあるものは反省がある反省のあるものは進歩がある進歩のあるものは夢がある』

行き詰まった時、この中の何処で立ち止まって居るのか自分を当てはめて、再スタートするようにしています。今年も、夢や希望を無くさないように動き始めます。

それでは、今年も千代さん・あごらの皆さんがお元気で、遠く離れた心細い友にパワーを送り続け下さるよう、願っております。

イービス艦の派遣を横目で気にしつつも、自分の抱えてることで手一杯だし、少しは愉しいことも

したいと、こんな私ですがお見捨てなく仲良くしてやって下さい。

(香川県丸亀市 岡本恵子)

惜別 松井やよりさん

（あごらめいと）の中でも飛び抜けた活動家として世界にその名を轟かせていた松井さんの早すぎる旅立ちには、あまりにも残念です。暮の三十日の山手教会は五階から地下一階まで立錐の余地もない会葬の人びとで、すばらしいお別れでした。

ご本人は思い残すことのない一生だったと想いますが、「もう誰も亡くなつてほしくない、病気になるってほしくない」と、年末年始をボーゼンと過ごしました。

松井さんは、第四回「地の塩賞」が松井さんに決まったことを、とても喜んでいらした由。「地の塩賞」を遺影にささげる集いを行い、改めてみんな追悼のことは捧

げたいと想っています。VAWW | NETでも追悼の集いをご計画の由、「地の塩賞」と合同でできないものか、ご遺族やVAWW | NETに問い合わせ中です。決定しましたら（あごら）のホームページで発表しますので、ご参加ください。

<http://homepage2nifty.com/agorai>

編集後記

- ◆すばらしい旅だったとは聞いていましたが、校正をしながら一緒に旅をしたような気持ちになりました。テルさんに学ばなくては！（中）
- ◆久々に『あごら』の編集をお手伝いしました。こんなすてきな参加者のみなさんと出会ったことに感謝しています。澤田さん、ありがとうございます。（礼）
- ◆世界は大荒れ。テルさん蘇って：（千）

目次で振り返る『あいら』三〇年

(一九八六年十二月〜八七年十二月)

一一四号 (一九八六年十二月) ¥400

〈山口〉下関に人工島が出来る！

なぜ私たちは立ち上がったか

私にとっての人工島

イルカだってイラン人工島

なして？ 軍艦島

ありがとう！ 鉄道の七人の輪

〈自らを装う〉4 今、ティーンズルックを楽しむ

〈連載〉働き続けた四十年

〈TOPICS〉現在以上の長時間労働！ 女が働けな

くなる労基法改悪答申／鉄道も鳥取の女教師も勝訴／『特

長』は、三月までにお届けします／一月十四日、十五日

「第二世代の〈あいら〉へ」運営会議／不良熟女の「深夜

のおしゃべり会」にどうぞ

〈女の講座・女のつどい〉

一一五号 (一九八七年一月) ¥400

〈新宿〉「実戦的女性学」に学ぶ

〈巻頭言〉女が試されるとき

いま女性運動は

〈行動する女たちの会〉の実戦的女性学に学ぶ

第一回 徹底分析 行動する女たちの十年 江原由美子

第二回 日本のフェミニズム運動のこれから 上野千鶴子

〈連載〉働き続けた四十年

〈TOPICS〉今年春から元気が出るわいなア

〈随想〉アメリカに翔んだ主婦

大阪にシニア・ウーマンズハウスを！ 〈大阪〉藤井里子

総理府調査の報道に意義あり！

〈家庭科の男女共修をすすめる会〉梶尾典子

〈あいらのあいら〉年賀状から／一〇九号「指紋捺捺を考

える」をめぐるつづき

〈女のつどい・女の講座〉

一一六号 (一九八七年二月) ¥400

〈九州〉女のネットワーキング

〈巻頭言〉私たちの選択

福田光子

斎藤千代

運営会議報告

奥川 睦

藤井里子

斎藤 千代

高橋芳恵

辻 和子

重兼文字

田口美香

KID

森川万智子

重兼文字

田口美香

交流の縁 福岡婦人団体交流会の七年

〈グループ紹介〉

交流の輪につらなる人とくるうぶ

福岡あんふあんて (民主主義を守る婦人の会) (福岡 Y W C A) (福岡主婦同盟) (福岡・女性と職業研究会) (新

日本婦人の会福岡県本部) (日本婦人会議福岡県本部) (婦

人民主クラブ全国協議会福岡支部)

会員のみなさん! (あごら) 十五周年記念全国大会に集合!

〈特集〉均等法で職場は変わったか

希望の星たりえるか均等法

均等法はひびかず

均等法で「女性活性化」のかけ声

残業も深夜業も依然として無制限

夫を配偶者として、家族手当・住宅手当を受給

均等法を追って

〈わたしの仕事〉今スーパーに何が起こっているか

地域の新聞に見る均等法・その後

西日本新聞 一九八六年四月〜十二月

〈あごら読書室〉『舞鶴に風ふくらむ』福岡市立婦人会館

創立十周年記念誌 / 『男も読もう 女性学入門』篠崎正

美著 / 『シニア・ウーマンズハウス報告』その2

小島サカエ

松野尾竹子

松崎 民子

中野由美子

池田保子

三好久美子

石原豊子

甲木京子

田村尅子

〈随想〉「軍用地二十年強制使用」のこと、そして女たち

の集いのこと

〈連載〉働き続けた四十年 (最終回)

私たちから見た辻和子さん

博多のオナゴは血が熱い (『週刊文春』より) 田辺聖子

辻和子さんへ辻和子より (『きぶんは夕やけ色』潮出版より)

〈あごらのあごら〉一〇八号「自立のおしゃべりに風穴をあ

ける」について / 折りにふれて / 入ってみたい / 新入会

一一七号 (一九八七年三月) ￥400

〈東京〉フェミニズム運動のない国・

東ドイツ (DDR) の女たち

「専業主婦」のない国、DDR

エーファー・ローマン (DDR人民議会議員、DFD

〈ドイツ民主婦人同盟 中央本部書記局長)

DDRの医療制度と労働者の労働条件

ズイクリット・シュタインベルク (看護婦、SED (ド

イツ社会主義統一党) 第十一回党大会代議員)

「女の輪」が敷いた道

〈インタビュー〉お二人に何ったこと ローマンさん シ

齋藤千代

ユタインベルクさん 聞き手 斎藤千代

〈自らを装う〉5 大工のあんちゃんは美しいか 紫村紀代

〈TOPICS〉ノー！ノー！ 核のゴミ捨て場／女・子ども

の一万円フェスティバル／賛同人大募集／選挙トビックス選挙トビックス／政府が予定した六十二年度婦人関係予算（資料・婦人問題企画推進関係予算案の概要）

〈あいらのあいら〉

〈女の講座・女のことい〉

一一八号

（一九八七年四月）¥400

〈山口〉各地に女の選挙を追う

〈巻頭言〉女の選挙は新しくてすばらしい 森川万智子

国家秘密法をみんなでふぎとばそう

各地に女の選挙を追う

声は鳥取で一番

〈ほとんど私〉の

向こう見ずの中心

企業城下町で革新回復を

石炭の街をバイクで走る

咲かせたい

自然といのちを守る街づくり

一〇〇人のもえる女たち

草の根グループの意志で

パキスタンの女たち Isis International 訳・寺沢恵美子

〈わたしの仕事〉4 アミダクジのような歩みの中で

はくらくみこ

〈資料〉議員中の婦人の状況

〈マル秘情報コーナー〉

〈あいらのあいら〉

〈女の講座・女のことい〉

一一九号 （一九八七年五月）¥400

〈埼玉〉'87 女たちの地方選レポート

〈巻頭言〉新しい選挙の創造 山口のり子

全力疾走「奇蹟」まで 東京都議・三井マリ子さん

富沢由子

女のネットワークがトップ当選につながった

小平市議 住田景子さん 丹羽雅代

九九四二人のみなさんありがとう

埼玉県議選 太田博子さん

指の折れるごと握手してくれて四五五票

福岡県稲築町 上田マサノさん

我々は負けたのかもしれない

鳥取県用瀬町 荻谷美鈴さん

組織選挙のなかで女たちがやれたこと

福岡県議 福田一枝さん 永田亜希子

もえる女の会は労組との接点をもとめている

福岡県議 さかき京子さん いしもとむねこ

魔法のような選挙でした

三鷹市議 菅原節子さん 湯川エイ子

〈わたしの仕事〉

パート現場報告 T・O

〈TOPICS〉日本海新聞 一九八七年四月二十九日

とっとり漫歩一〇二 絶望するなマドンナ候補

〈女のつどい・女の講座〉

一一二〇号 (一九八七年六月) ¥400

〈旭川〉「母子健康手帳の様式改訂」に疑問!

〈巻頭言〉母子保健から(父母子保険)へ 山内恵子

「団体事務化法案」の制定にともなう「母子健康手帳の様式改訂」に疑問!

〈旭川あいら〉のとりくみ

私たちの求めるのは 父母子保険事業

山内恵子

母子(健康)手帳から拾った「いいなあコレクション」田代慶子

資料1 母子保険法の改悪のねらい

資料2 優生思想にもとづく人的資源の確保

資料3 優生保護法・母子健康法と人口政策

資料4 優生思想につらぬかれた日本の法律

資料5 母子健康法の「改正」点は三点

資料6 母子保健手帳の様式の改訂について(厚生省)

資料7 母子手帳とは

新旧母子健康手帳の主ながい

十一年ぶりに改訂された母子健康手帳を新旧比較してみても、

その問題点は……母性への管理強化と「異常児」チェック

共に育ちあう教育を!

〈旭川・障害児の教育を考える会〉大西淑子

母子関係をみつめて 白井友子

いらないうしよ! 原子力発電

私がグウタラなわけ 早苗麻子

専業主婦の気持ち エコロジカル無賃労働めざして

森紀美子

新聞意見広告をやっちゃおう

京田初美

〈わたしの仕事〉6 只今でんわ番 桑原ちえ子

〈TOPICS〉アジア民間交流ぐるーぷ入会とYABA KAプロジェクト協力のお願

〈女のつどい・女の講座〉

一二二号（一九八七年七月） ￥400

〈東京〉こまかされまい労基法改悪

〈巻頭言〉「世帯主」の廃止は世界のすう勢

労働基準法の改正についての要請 五十一団体の要請書

国際婦人年日本大会の決議を実現するための連絡会

パート・未組織労働者連絡会の請願書

労働基準法第三十四条改正に関する請願

労働基準法改正案のうち第三十二条の二から同条五の上程

取り下げを求める請願

東京弁護士会の意見書

闘ってひるむことない しにせの迫力と余裕 NOW（全

米女性同盟）ニューヨーク支部を訪ねて 鷺 留美

〈わたしの仕事〉7 外資系企業で働いて 鈴木慶子

〈女のつどい・女の講座〉

一二二号 一九八七年九月 ￥400

〈札幌〉性と生 体と心 生き方の交叉点

〈巻頭言〉性と生 性の思いこみ

体と心 生き方の交叉点 性を語る

谷百合子

愛のかたち

十代・二十代の性

セックスもコミュニケーション

売買春

ポルノグラフィーの思想

性教育の授業をとおして

子どもたちに性を語れますか

〈インタビュー〉月経

〈座談会〉思いこみいっぱあーい わたしの性・あなたの性

思いこみ その1 レイプ

思いこみ その2 結婚

思いこみ その3 避妊

思いこみ その4 男は誘うもの 女は誘われるもの

思いこみ その5 愛の論理

さらば 思いこみの性

子どもたちがあぶない KIDNAP！美少女マーケット

〈あごらのあごら〉 新規入会

ありがとう！ 無事十五周年記念集会ができました

〈女のつどい・女の講座〉

〈九州〉がめ煮

〈巻頭言〉怒りの「がめ煮」

「窓口に出せない」ですって

夫を扶養しようとした場合

「履歴書に保護者欄はなかない」

お茶くみは、女の位置の合わせ鏡！？

私が保護者でなぜわるい

男性にも家事権を！

生まれてくる子の性別は？

アンタたち あんまりじゃない！

テレホンクラブ

「弔意」の強要なんてゴメンです

広がってます！「脱原発の本」

行革はすみずみまで広がって子どもが危ない

人権無視がすみずみまで広がって……

おかしいんじゃない、児童手当のポスター

なぜもつと怒らないの？

沖繩から天皇へのラブコール こんなことあつていいの？

「Xデー」

〈議員稼業 半年目〉藤田一枝県会議員直撃インタビュー
〈職業訓練校を出て〉 丹生秀子

〈あこら読書室〉

おなじ著者による二冊の本／『サンタクローズってほん
とにいるの？』てるおかいつこ・文 すぎうらはんも・絵
福音館書店 一九八一年／『ゆとりの経済』暉峻淑子著

東洋経済新報社 一九八五年

〈わたしの仕事〉8 歌い続けて 名和英子

〈新聞記事〈あこら〉十五年記念集会〉

西日本新聞 山梨日日新聞 大分合同新聞

〈女の講座・女のつどい〉

渡辺嘉津子
渡辺嘉津子
村山みき

藤本朋子

島袋由紀

藤本朋子

第一二四号 (一九八七年十一月) ¥400

〈東京事務局〉女たちは行動する

〈巻頭言〉女たちは行動する あこら事務局

みんなでなろう 梁容子さんの罰金一円の輪！

指紋を通して、すばらしい友人たちに出合った 葵和英

〈TOPICS〉ご存じですか? 流産・死産でも健保の
給付金が出ますヨ / 「猫の事務所」(本・ミニコミ・喫

茶) オープン / 「均等法」を見直そう! (ワーキング・

ウーマン 男女差別をなくす愛知連絡会通信) より /

〈随想〉夫婦別居の配転は不当 樋口事件、その後 (あ

ごら大阪) 澤田和子 / ピースポート⁸⁷に参加して 池田

正枝 / 女子大生の就職戦線 (津田塾大学女性問題研究会

胡蝶通信) より 中道真紀

〈わたしの仕事〉9 書店に勤めて 加藤田カツ子

〈拠点だよりから〉 あごら札幌 松平明美

機会均等法が施行されて一年半 タカハシヨシエより

拝啓 小田実様

〈あごらのあごら〉

〈女の講座・女のつどい〉

一一五号 一九八七年十二月 ¥1800

特集33号 新聞切り抜きに見る女の16年

リブの台頭 一九七〇〜一九七二

〈AGORAZEIN〉 新聞記事のうしろ側

婦人記者に聞く 金森トシエ 佐藤洋子 深尾飢子 増田
れい子 松本侑壬子

一九七〇年

〈風潮〉当世女事情 進出 主婦パワー リブ

〈集会・活動〉

〈労働 パート〉

〈法・制度〉裁判 制度

〈調査・統計〉

〈保育・教育〉保育 女子教育 性教育 障害児 PTA

制度 荒廃

〈からだ〉妊娠 出産 中絶 体外受精 危険 保健婦

〈意見・投書〉働くこと 解放 農村女性 差別 女の気

持ち 性・性教育 その他

〈相談〉夫 婚家 愛

〈人〉ひと 賞 訃報

〈本〉

〈繁栄の陰に〉

〈公害〉

〈差別〉

〈戦争〉

〈海外〉南ベトナム ビルマ セイロン インド ヨルダン
ン ビアフラ ソ連 フランス イタリア イギリス ア
イルランド アメリカ合衆国 その他
婦人の地位 日本とアメリカ
市川房枝

一九七二年

〈風潮〉当世女事情 進出 くらし 主婦

〈集会・活動〉

〈リブ〉

〈婦人運動の人脈〉消費者運動 廃娼運動 女流民権運動

母親運動 婦人労働 裁判闘争

〈労働〉

〈法・制度〉制度 裁判

〈調査・統計〉

〈保育・教育〉保育 教育

〈からだ〉

〈意見・投書〉

〈相談〉

〈人〉ひと 賞 訃報

〈本〉

〈公書〉

〈差別〉
〈戦争〉
〈繁栄の陰に〉
〈海外〉中国 ベトナム イギリス アメリカ

一九七二年

〈風潮〉進出 主婦 高年婦人パワー 第二十回全国婦人

会議 物価・消費 風潮

〈集会・活動〉活動 グループ リブ

〈職場〉

〈法と制度〉制度 裁判

〈調査・統計〉

〈保育・教育〉保育 教育

〈からだ〉

〈意見・投書〉

〈相談〉

〈人〉ひと 賞 訃報

〈本〉

〈繁栄の陰に〉

〈差別〉

〈海外〉中国 フィリピン ベトナム インドネシア シ

ンガポール ブルガリア フィンランド スウェーデン
スイス ドイツ フランス イギリス アメリカ

〈あじら読書室〉

『女という快楽』上野千鶴子著 頸草書房／『危険な話
チエルノブイリと日本の運命』広瀬隆著 八月書館／『女
と男の経済学 暮らしとエロス』深江誠子著 社会評論社
／『強姦された男』マッタ・ティツカネン著 多勢真理訳
草思社／『女性のライフサイクルと法』佐々木静子編 ミ
ネルヴァ書房／『結婚パスポート』佐藤文明著 現代書館
『女 あんたが主人公』小西綾 おおいに語る』駒尺喜美
十あつ、わかつたの会編 松香堂／『オバサンは怒った
ゾ！ 働く中高年婦人白書』働く婦人の会編 ミネルヴァ
書房／『老後を考える 十五年間のあゆみの記録』小金井
老後問題研究会／『0度の女 死刑囚フィルダス』ナワル
・エル・サーダウイ著 鳥居千代香訳 三一書房／『女や
るって お・も・し・ろ・い』大阪府企画部婦人政策課編
／『均等法時代を生きる 働く女性たちへの応援歌』大脇
雅子著 有斐閣選書／『フェミニズムの歴史』ジャン・ラ
ポー著 加藤康子訳 新評論社

〈あじらのあじら〉

ふえみん

f e m i n

ジェンダーの視点で社会を眺めとく新聞です。

〒150-0001
東京都渋谷区神宮前
3-31-18

03-3402-3244

03-3402-3238

FAX 03-3401-3453

E-Mail femin@jca.apc.org

URL <http://www.jca.apc.org/femin/>

見本紙
ご請求下さい!!

大阪支局
〒530-0041
大阪市北区天神町
3-10-8-404

& FAX 06-6356-0778

★タブロイド判 8ページ/毎月5・15・25日発行
購読料：年間9,000円・半年4,500円(送料込み)

自分で
考える人と
一緒に
考えたい。

femin

〈あごらびくは、人と人が出会うひろば〉――

思い悩んだとき、もつと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき……。心おきなく話し合える仲間がいる……。そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。

雑誌「あごら」を軸に、よりよい自分と社会を目指す、ゆるやかな連帯。「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。

会費は月刊「あごら」の誌代込みで月額七百円。一年分前払いが原則ですが、ご相談に応じます。入会金は一千円。ハガキかFAX、電話を頂ければ、申し込みカードをお送りします。

〈BOC〉の登録番号、どうぞ……

一九八〇年に生まれた〈BOCバンク・オブ・クリエイティビティ〉は、〈創造力の銀行〉。あなたの創造力や特技、希望の報酬を、ご連絡ください。各国語翻訳・通訳・企画・調査・取材・編集・校正等の専門職のほか、どんな〈創造力〉でも歓迎！。ただし、半年以上〈あごら〉会員の方に限ります。

連絡先

ごちうりせ 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4 中ビル
TEL 03-3354-3941(代) FAX 03-3354-9014
Eメール XLV05467@nifty.com

あごら 280号 長谷川テルを辿る旅 ●発行2002年12月20日

●編集 あごら大阪

●発行所 BOC出版部 〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

●TEL 03-3354-3941(代) FAX 9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com

●定価 本体 930円+税 ●振替 00100-0-5264 BOCあごら編集部



9784893061287



1920036009305

ISBN4-89306-128-3

C0036 ¥930E

〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4

定価 本体930円+税

企画・編集・翻訳…
何でもご相談ください

創業1960年 —
女性専門職集団
BOC

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

☎03-3354・3941 〇3354・9014

E-mail XLV05467@nifty.com

男女共同参画の
BOCシニアも
スタートしました。

各種プランニング
各種調査

取材・撮影・編集

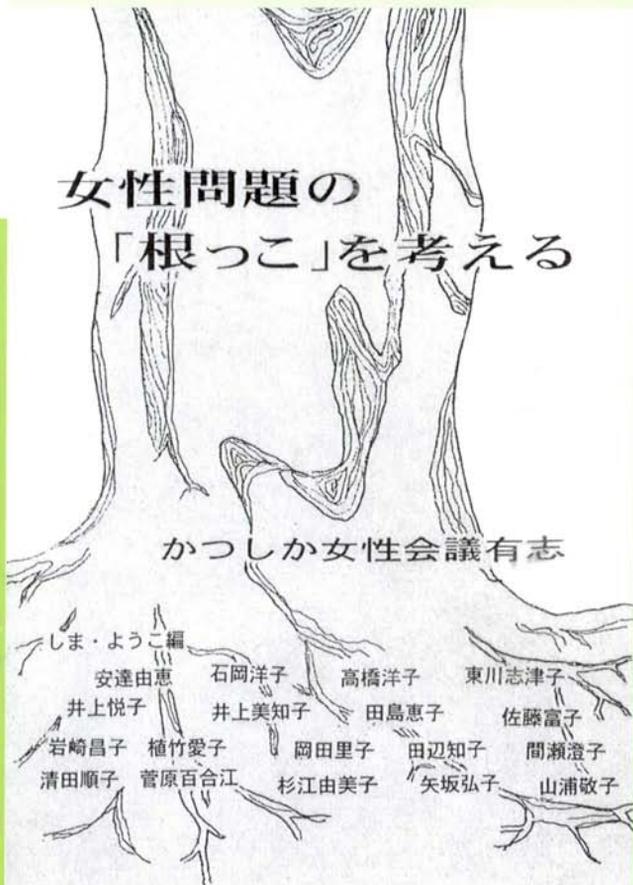
校正・デザイン・レイアウト

各国語翻訳その他

ベテランの知恵と経験を
お役立てください。

ジェンダーってなあに？

フツの女たちがフツに語る
おもしろい わかりやすい 本です。
しま・ようこ編 　　　　　 ¥1,500



女性問題の 「根っこ」を考える

かつしか女性会議有志

しま・ようこ編

安達由恵

石岡洋子

高橋洋子

東川志津子

井上悦子

井上美知子

田島恵子

佐藤富子

岩崎昌子

植竹愛子

岡田里子

田辺知子

間瀬澄子

清田順子

菅原百合江

杉江由美子

矢坂弘子

山浦敬子

サイレントマイノリティのBOC出版部

〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-9-4

03-3354-3941 FAX03-3354-9014

郵便振替 00130-3-39331

E-mail boc@mb.infoweb.ne.jp